

チームさかわ
まじめに、
おもしろく。

第５次 佐川町総合計画（H28 → H37）



目 次

序章　総合計画策定にあたって ……7

1. 計画策定の趣旨 ……8

2. 計画の構成 ……10

3. 計画の特徴 ……11

4. 計画策定のプロセス ……15

5. 計画策定の体制 ……19

第 1 章　佐川町のいま ……21

1. 佐川町の現況と社会動向……22

2. 佐川町の概況 ……27

3. 佐川町民アンケート ……33

4. 佐川のまちの声 ……44

5. 総括 ……54

第2章　佐川町の未来像 ……57

1. 未来像を設定する上で大切にした考え方 ……58

2. 佐川町の目指す未来像 ……60

3. 未来を実現させるための分野別方針 ……62

4. 人口予測 ……66

第3章　未来を実現するために ……69

分野別施策の対系図 ……70

教育 ……72

産業と仕事 ……75

結婚・出産・育児 ……78

観光振興と情報発信 ……81

健康と福祉 ……84

安全・安心 ……87

行財政 ……91

参考資料

1. 佐川町総合計画審議会

2. 経過

3. 佐川町総合計画審議会条例

4. 参考文献

序章　総合計画策定にあたって

1．計画策定の趣旨

人がイキイキと輝き、笑顔があふれる幸せなまちをみんなで創っていきたい。気持ちのいい挨拶がまちの至るところで交わされ、町のみんながつながり、支え合う、幸せな佐川町をみんなで創っていきたい。そんな思いを込め、多くの町民の皆様にご参加をいただき、この第5次佐川町総合計画「みんなの総合計画」の策定を進めてまいりました。人はそれぞれに考え方、生き方が違います。また、好きなことや、得意なこと、やってみたいことも違います。行政と住民の皆さんが一緒になって、みんなで幸せな町づくりを進めていくためには、それぞれの個性や違いを活かしながら同じ方向に向かって進めていくことが大切になります。総合計画は、そのための羅針盤ともいうことができます。

佐川町にはたくさんの課題が存在します。捉え方を少し変えてみると、課題を解決することでより幸せな「みらい」を創りあげるチャンスがある、とも考えられます。一人で解決できる課題もあれば、一人では解決することができず多くの人が関わることで解決できる課題もあるでしょう。また、行政だけではなく、住民の皆さんに参画していただくことで、課題を根本的に解決できることもあるでしょう。そのためには、町の課題を「じぶんごと」として捉えていただき、自分ができることを主体的に取り組んでいただくことが大切だと考えています。「やってみよう!」と思っていただき、自分がやりたいことを仲間にも声をかけて、楽しく、自分らしく取り組んでいただければ、活動の輪が広がっていくと信じております。この総合計画をもとに、是非「みんなが主役」の町づくりを進めていきましょう!

終わりに、地区懇談会をはじめ、しあわせ会議、未来づくりサロンなど、多くの住民の方々が参加していただき、貴重な提言をいただきましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。この総合計画策定に関わっていただきました、すべての方々に感謝を申し上げ、また大好きなふるさと「佐川町」でこの仕事をさせていただいておりますことに心から感謝申し上げ、私からのご挨拶とさせていただきます。

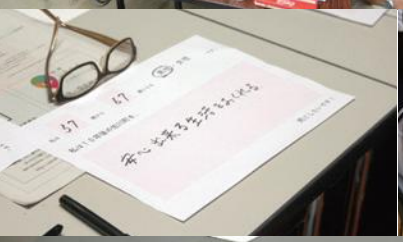
平成28年4月1日

佐川町長　堀見和道




























2. 計画の構成

本計画は、佐川町民がより豊かで幸せに暮らせるよう、また計画的で持続可能な行政運営を行っていくための具体的な方法を明らかにした本冊と、町民自身が町で暮らすことを楽しみ、自分たちの手で佐川町をつくりあげていくための考え方と方法をまとめた別冊の、2冊で構成されています。2冊とも計画の期間は10年間（目標年度:平成37年度）としますが、さらに長期的な未来の展望も含めたものとします。

本冊の構成

第1章:佐川町のいま 現在の佐川町と佐川町を取り巻く社会状況を整理した章	・佐川町の現況と社会動向 ・佐川町の概要 ・住民アンケート ・佐川町民の声
第2章:佐川町の未来像 理想の佐川町像とその基本となる考え方を明らかにした章	・まちづくりの理想像 ・分野別7大方針 ・将来推計（人口推計）
第3章:未来を実現するために 理想像を実現するための具体的なアクションを分野別に整理した章	・分野別体系図 ・分野別のアクションの内容

別冊の構成

プロセスパート 総合計画の別冊と本冊がどのようにしてつくられたのかを説明する章	総合計画ができるまでの6つのステップ
ビジョンパート “まじめでおもしろい”未来の佐川町の姿とそれを実現するための方法を示した章	・佐川町のビジョン ・未来の佐川の楽しみ方25

3.　計画の特徴

(1)　町民が一体となって『みんなでつくる』

これまでの総合計画は、町政運営を中心に設計されていたため、策定のプロセスに一般の町民が参加し、意見を言える機会は限られてきました。また、計画づくりに関わっていたのも限られた人数の役場職員だったため、職員全体として総合計画への理解が充分ではなく、計画を100%活用しきれずに終わってしまったという背景があります。これからの町づくりは、町民全体が主体性と創造力をもって一緒に町に携わっていく必要があるため、『みんなでつくる総合計画』をスローガンに、多くの町民を巻き込みながら、策定が進められました。

策定の中心となったのは、役場職員からなる26名の各課メンバーです。第4次総合計画の振り返り、ヒアリング、町民ワークショップの運営など、すべての工程をメンバー全員で取り組みました。また、町民みんなで一緒に10年間の町づくりを考える場として、193名が参加した佐川の幸せな未来を考える「しあわせ会議」を皮切りに、町民ワークショップ（未来づくりサロン）を全16回開催。延べ349名の町民が参加し、佐川町で暮らす中で実感している課題とそれらを解決するために、自分たちができることを中心に意見交換を行いました。このように、町づくりを行う上で最も重要な指針である総合計画の「策定」から具体的な取り組みの「実施」に至るまで、積極的に町民の想いを反映する手法を取り入れたことが、本計画の大きな特色です。



しあわせ会議（平成27年2月11日）



未来づくりサロン 町民編（平成27年5～7月）

⑵　幸福度指標の導入

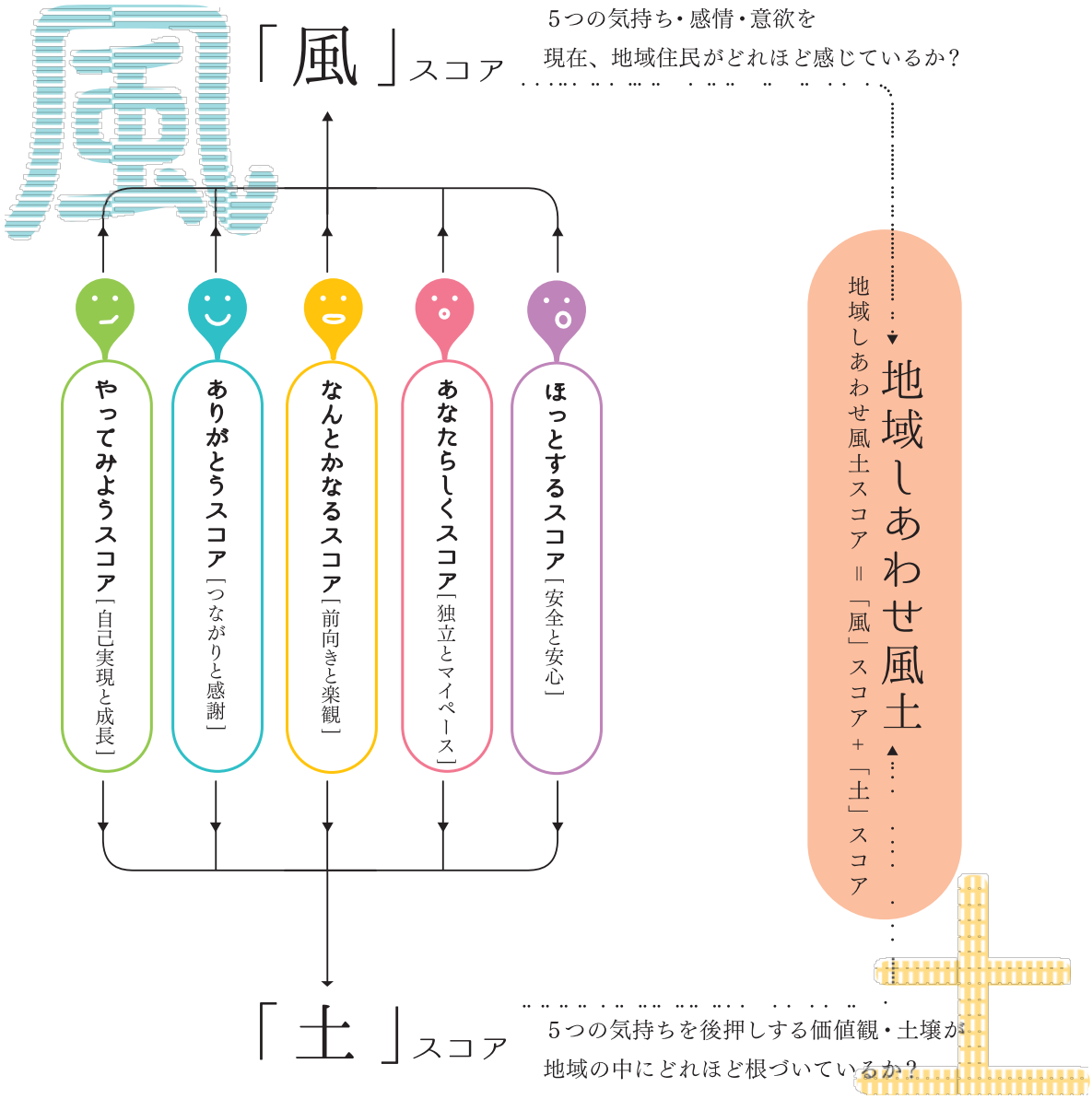
成果をはかりにくい総合計画の評価指標として、「地域しあわせ風土指標」を導入しました。この調査は、従来の幸福度調査で重視されてきた病院の数や所得といった客観的な評価指標ではなく、住民の主観的な感情と実感している幸福度を最大限調査に反映させるという独自性を備えています。

幸福学の第一人者・前野隆司教授によると、人が幸せを感じる要因は大きく4つの因子で構成されます。「自己実現と成長」「つながりと感謝」「独立とマイペース」「前向きと楽観」。人は成長の機会に恵まれ、大切な人とのつながりを保ち、自分らしく、前向きな気持ちで行動できれば、しあわせな人生を送れるということです。ただし、食べるのに困るほど経済的に困窮していたり、災害など身の危険を感じていたら、しあわせとは言えません。そこで、地域しあわせ風土調査では、この4つに雇用・経済・防犯・防災などに関連する「安全と安心」を加えた5つの因子を、地域の幸福度を高めるために必要な要素だと定義しています。

この調査では、さらに地域の幸福度を2つの側面から調査しています。1つはそこで暮らす個人が、前述の5つのしあわせの因子を現在どの程度感じているかという「風」の調査です。5つの因子を感じている人が多いほど、しあわせな人が多いことになります。

もう1つは、その地域にそれを後押しする価値観や土壌がどの程度根ざしているかという「土」の調査です。地域には長年培われた独自の考え方や価値観が根づいています。5つのしあわせの因子を住民が感じることを後押しする土壌がなければ、結局のところ定着しません。この2つが揃って始めて、地域の中長期的なしあわせを実現することができます。

本計画では「佐川町民のしあわせ度を最大化する」ことを目標に、10年間の町づくりを進めて行きます。



［風］10の質問

やってみよう指標

1. 得意としていることがある
2. 何か、目的・目標を持ってやっていることがある

ありがとう指標

3. 人を喜ばせることが好きだ
4. いろいろなことに感謝するほうだ

なんとかなる指標

5. いまかかえている問題はだいたいなんとかなると思う
6. 失敗やいやなことに対し、あまりくよくよしない

あなたらしく指標

7. 自分と他人をあまり比べないほうだ
8. 他人の目を気にせずに、自分がやるべきだと思うことはやる

ほっとする指標

9. 現在の暮らしや、自分の将来への不安は少ないほうだ
10. 自分は安全な生活を送っていると思う

［土］10の質問

やってみよう指標

1. 自分の好きなこと、得意なことに熱中している人が多い地域性、風土
2. 目標を持って頑張る人を応援する地域性、風土

ありがとう指標

3. 助け合いや感謝の気持ちを大切にする地域性、風土
4. 人間関係が豊かで、挨拶や笑顔あふれる地域性、風土

なんとかなる指標

5. 挑戦することを応援し、失敗を許容する地域性、風土
6. 楽観的、前向きな地域性、風土

あなたらしく指標

7. 人と違うこと、個性を大切にする地域性、風土
8. よそもの、若者、マイノリテイなど多様な人を受け入れる地域性

風土ほっとする指標

9. 食べものや、住まいには困らない地域性、風土
10. 身の危険を感じず、安全に暮らせる地域性、風土

(3)　町民が“楽しく”まちに関わる総合計画・別冊

第5次佐川町総合計画においては、行政施策の指針としての本計画書に加え、町民一人ひとりが主体的に明るい未来へ向けたアクションをおこし、町づくりに関わるための方法を示した町民向けの別冊を作成しています。この別冊には、町民ワークショップから出て来たさまざまなアクションをもとに描かれた10年後の佐川町におきる25の未来像と、それを実現するための町民の具体的な行動が示されています。『肩肘を張った「町づくり」から、町での生活を楽しむ「まちあそび」へ』を制作の基本方針に据え、自分の得意なことを誰かに教えたり、植物を育てたり、ものづくりをしたりするなど、佐川の町のなかで暮らすことを楽しむことで、明るい佐川町の10年後をみんなで実現していきましょうと呼びかけています。



「本冊の表紙デザインが入ります」



「別冊の表紙デザインが入ります」

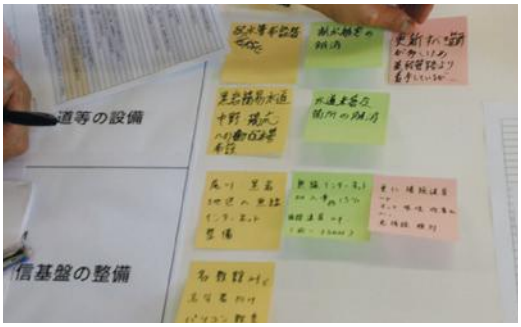
4. 計画策定のプロセス

本計画は、平成26年度から平成27年度の2年間をかけて策定されました。

年	月	プロセス	内容	
平成26年度	6月	現状分析	政策レビュー	過去10年間の佐川町の政策を振り返り、成果と課題を洗い出した。
	7月		町民アンケート	町民対象に、佐川の住み心地や幸福度、今後10年力をいれるべき事業などを聞き取るアンケートを実施した。
	8月	未来アクションづくり1	データ分析と課題構造化	佐川町を取り巻く環境変化に関するデータを分析し、10年後佐川がどんな町になるのかを予測した。
	9月		未来アクションづくり（役場職員編）	佐川町の抱える課題を解決し、明るい町を実現する未来アクションを出し、明るい町の未来像を描いた。
	10月			
	11月	コミュニティヒアリング	コミュニティヒアリング	町民41組に対するインタビュー調査を通じて、町民の思い、課題、悩み、未来展望を聞き取った。
	12月			
	1月			
	2月	未来アクションづくり2	未来アクションづくり（町民編）	明るい佐川の2025年未来を実現するためのアクションを考えるワークショップを全部で17回実施。2/11に開催されたしあわせ会議を皮切りに、分野別ワークショップ6回、次世代ワークショップ5回、地区別ワークショップを5回開催した。
	3月			
平成27年度	4月			
	5月			
	6月			
	7月			
	8月	計画書づくり ・施策 ・ビジョンワード ・計画書	施策立案	町民から提案されたアクションをベースに、総合計画の施策を立案した。
	9月		総合計画 本冊/別冊制作	立案された施策をもとに、行政運営を行っていくための本冊と、町民発アクションをわかりやすく表現した別冊を制作した。
	10月			
	11月			
	12月			
	1月			
	2月			
	3月			

現状分析

第1回 役場職員ワークショップ 6/18（政策レビュー）



役場職員からなる策定メンバーで10年間の政策を振り返りました。「行財政」「環境」「商業」「医療・福祉」「教育」「暮らし」の6テーブルに分かれ、分野ごとに10年で実施した取り組み、その施策の成果と課題をまとめました。

町民アンケート 6/16〜7/18



20歳以上の佐川町民を対象にアンケートを実施。458名から回答を得ました。10年前に行われたアンケートと同様の質問と、佐川町民の幸福度を測定するための質問の2種類の質問で構成されています。

未来アクションづくり1（役場職員編）

第2回 役場職員ワークショップ 8/7（データ分析と課題の構造化）



将来推計データを活用しながら、佐川がどんな町になるのかを考えるワークショップを行いました。人口減少や高齢者の増加などの人口構造の変化、医療福祉関連支出の増加やインフラの老朽化などの生活の変化等を示す推計データを活用し、「行財政」「医療・福祉」「教育」など、それぞれの未来にどんな変化が起きるのかを予測しました。

第3回 役場職員ワークショップ 8/28,29（未来アクションづくり）



安心・安全な生活を送ってもらうために確実に進めていくべき課題「ベーシック課題」と、新しいことに挑戦する課題「チャレンジ課題」の計10個の課題別に、「未来変化の微細な芽」が見えるニュースや情報をカードにまとめた未来変化カードを使い、明るい未来を実現するための具体的なアクションを考えました。

コミュニティヒアリング

第4回 役場職員ワークショップ 10/21（ヒアリング対象者ピックアップセッション）



町民アンケートで聞けなかった深い課題を聞き、町のことをより深く理解するために、どんな人の話を聞くといいか?どんな人を巻き込んでいきたいか?をテーマに、「教育/福祉/医療」「農林業」「商工業/町の活性化」「環境/暮らし」の4つのテーブルに分かれ、佐川町の未来人材について語り合いました。

町民ヒアリング　11/9〜11/16,11/29〜12/7



ワークショップで出した佐川町で活躍する素敵な人たちに、1時間程度時間をもらい、ヒアリングを行いました。町づくりの活動の歴史から、活動してきて楽しかったこと、難しかったこと、そして佐川町の抱える課題や町への思い、今後の町政への期待、活動の展望など、さまざまなことを語って頂きました。

未来アクションづくり2（町民編）

しあわせ会議 2/11



佐川町のしあわせな未来を考える「しあわせ会議」を町民を対象に開催。総勢193 名が参加し、幸福学の第一人者・慶応義塾大学大学院・前野隆司先生の「幸福のメカニズム」と 町長の「佐川町の幸福な未来像」による講演。その後、テーブルごとに幸福の4つの因子を活用しそれぞれの考えるしあわせな町の実現方法を考えるワークショップを実施しました。

未来づくりサロン:分野別（全6回:5/14,15,18,19,25,26）



佐川町の大きな未来を語る「しあわせ会議」に続いて、アンケートやヒアリングを通して見えてきた町民の関心が高い6つの分野別のワークショップを開催しました。「観光振興と情報発信」「健康づくり」「産業と仕事」「結婚、出産、育児」「安全・安心」「教育」のそれぞれの分野が抱える課題を解決するために、町民である自分たちができるアクションを班ごとに話しあいました。

未来づくりサロン:次世代(全5回:6/10,11,12,15,7/7)



子どもたちが住み続けたいと思える町、将来への希望を持てる町を目指すことは、町づくりの大切な目標です。町内の加茂中学校、黒岩中学校、佐川中学校、尾川中学校、佐川高校の生徒を対象にした未来を考えるワークショップを開催しました。こどもたちの目線から佐川町の魅力を再発見し、次世代に何を残していくべきか、残すために自分たちには何ができるかを話しあいました。

未来づくりサロン:地区別(全5回:6/18,19,22,29,30)



地域の結束力の強い「尾川地区」、外からの人を受け入れる懐の広い「斗賀野地区」、多様な人が暮らす「佐川地区」、個性的でパワフルな「黒岩地区」、繊細で上品な「加茂地区」。それぞれの地域の特徴や独自の課題を計画に反映させるために、地域別のワークショップを行ないました。

計画書づくり

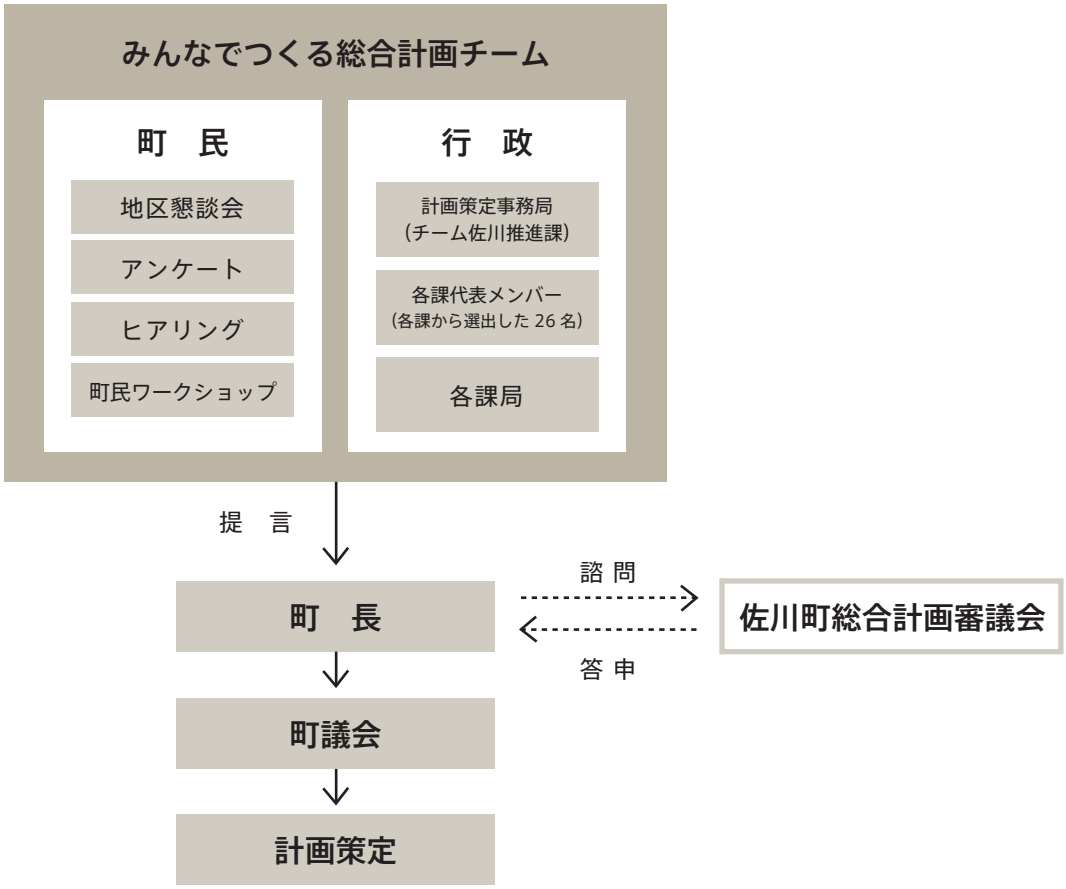
第5回 役場職員ワークショップ 7/30,31(施策立案)



町民アンケート、ヒアリング、しあわせ会議、未来づくりサロンを受け、行政として取り組むべき施策を立案する2日間の合宿をしました。分野別ワークショップで取り組んだ6分野に「行財政」を加えた7つのグループに分かれ議論しました。この合宿でまとめた施策をもとに各課からのフィードバックを受け、最終的に7分野45施策にまとめました。

5. 計画策定の体制

町民、行政が共に未来を考えるワークショップの中で、第5次総合計画のもととなるアクションを考えました。そのアクションの提案を受け、佐川町役場の各課からの代表からなる26名の策定メンバーで原案を作成しました。佐川町総合計画審議会への諮問・答申を経た後、町議会での議決を得て、「第5次佐川町総合計画」の策定となりました。以下に第5次佐川町総合計画の策定推進体制を示します。



第１章　佐川町のいま

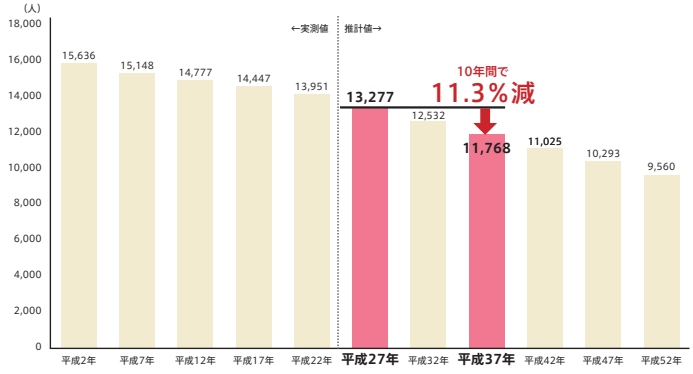
1．　佐川町の現況と社会動向

(1)　人口減少

平成17年を境に、日本の人口は今後100年は続くといわれる減少局面に入りました。佐川町も例外ではなく、日本全体の人口減少より早いペースで確実に減少し始めています。現在の佐川町の人口は1万3,455人（平成27年10月時点／住民基本台帳）ですが、10年後の平成37年には1万1,768人にまで減少すると予測されています。

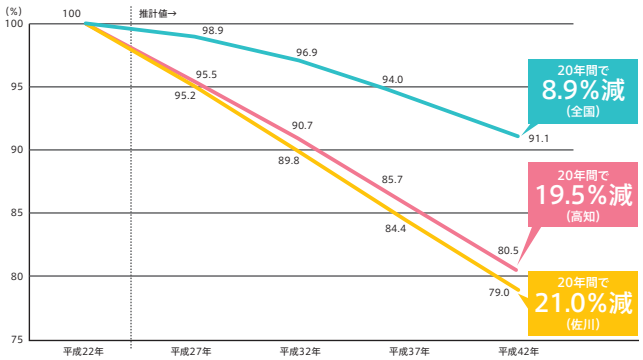
人口減少と少子高齢化の進行により、労働力人口の減少や経済規模の縮小など、地方財政に大きな影響を及ぼすことが懸念されます。人口規模が縮小する中で、いまある資源（ヒト・モノ・カネ）を充分に活かしきり、人材を中心とした新たな資源を掘り起こしていくことが必要となってきます。

総人口の将来推計（佐川 H2-H52）



出典:H2-22総務省統計局「国勢調査」、H27-52 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」（H25.3月）
※20年間の減少率は小数点以下第二位を四捨五入

総人口の将来推計の変化率（全国/高知/佐川H22-H42）



平成22年のそれぞれの総人口を100としたときの変化率（小数点第二位四捨五入）　出典:全国 H22-42 国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（H24.1月）高知・佐川 H22-42 国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」（H25.3月）より算出

⑵　若年女性の人口流出

15歳から49歳の出産・子育てを担う若い世代の女性の人口を、再生産年齢人口と言います。その中でもさらに、20歳から39歳の女性人口が平成22年から平成52年の30年間で50%以上減少する自治体を“消滅可能性都市”として発表した日本創成会議・人口減少問題検討分科会「2040年人口推計結果」は、全国約1,800の市区町村のうち半数近くの896自治体を消滅可能性都市に分類し、日本に大きな衝撃を与えました。

佐川町でも平成22年には1,186人だった再生産年齢人口が、30年後の平成52年には約半分となる597人にまで、30年間で49.7%も減少すると予測されています。少子化による自然減以外に、仕事を求め都会に出てしまう社会減が、この世代の人口減少に拍車をかけています。若年女性人口が減少し続ける限り、人口の再生産力は低下し、総人口の減少に歯止めがかかりません。若い女性にとって魅力的で働きやすい場をいかに増やし、産み育てやすい町をつくりあげていくか、地域の手腕が問われています。

⑶　高齢化率の上昇と健康志向の高まり

成熟した社会では、医療の発展により平均寿命が長くなる一方で、価値観の多様化や晩婚化が進み、子どもの数は減少し、社会の中で高齢者の占める割合が増えていきます。65歳以上の人口が総人口に占める割合である高齢化率の上昇は、先進国を中心に進んでいますが、日本の高齢化は他諸国よりも速いペースで進行し、まだ誰も経験したことのない高齢社会に直面しています。

佐川町の高齢化率も、平成27年には37.6%でしたが、平成37年には42.3%と、町民５人中２人が高齢者となります。高齢化の進行に伴い、医療・福祉分野の一層の充実が期待されると同時に、老後をよりよく過ごすために、高齢者自身が自分たちの手で自立して健康に生活できる期間“健康寿命”を伸ばしていこうという意識も高まってきています。国民医療費の増大により財政が逼迫する中で、元気でいきいきと暮らす高齢者を地域に増やしていくことが、持続可能な地域を運営する上で重要となってくると言えます。

⑷　地域主権の加速

地方分権よりさらに一歩踏み込んだ、地域主権の確立に向け、自治行政権、自治立法権、自治財政権の強化が推進されると予測されています。内閣府は平成26年から新たな分権改革の手法である、自治体の提案をベースに検討を進める「提案募集方式」を開始。提案計866件のうち、大規模農地の転用許可権を国から都道府県や国指定市町村に移譲するなどの495件について各府省が対応できると判断するなど、確実に地方の裁量が増える方向に向かっています。

地域主権が加速することで、地域の独自性と個性が際立つ時代に突入していきます。佐川町も限られた財源と人材を有効に活用しながら、町民との協力と創意工夫により特色のある地域運営を進めていくことが求められます。

⑸　地域のつながりの希薄化とコミュニティ構造の変化

自治会、青年団、消防団などに代表される地域コミュニティは、お互いを日頃から気遣う見守りなどの機能やちょっとした助け合いなどの相互扶助、地域に根ざした伝統文化の維持、コミュニティ全体の意見調整など、さまざまな機能を担ってきました。しかし、人口減少とライフスタイルの多様化、個を重んじる価値観の高まりなどにより、地域内のつながりが希薄になってきています。地域の活力が低下する中で、これまでのコミュニティのあり方を見直し、コミュニティ運営の再編に取り組む必要があります。そんな中注目すべきなのが、60代以降の高齢者です。佐川町でも高齢者の社会参画が増え、地域コミュニティの中で重要な役割を果たしています。このように、定年退職後は余暇時間が増えることにより、現役世代に比べ地域への帰属意識が高まる傾向にあります。今後、人口に占める割合が増える高齢者が、地域に関わる機会を増やすことで、まちを元気にする活動人口を増やし、地域の活力を維持・向上できると期待できます。

⑹　安全･安心への意識の高まり

世界的にみて、地震や台風、洪水などの自然災害の発生数は、年々増加しています。最近の10年間をみると、1970年代に比べ、発生件数･被災者数ともに約3倍に増加しているというデータもあります。もともと日本は、地震の発生しやすい場所に位置し、四方を海に囲まれ、国土の多くを山地が占めるなど、自然災害が発生しやすい環境にあります。これに加え、地球温暖化による異常気象などにより、日本もまた、地震や集中豪雨、土砂災害などの自然災害が増えてきています。高知県も例外ではなく、近い将来発生すると予測されている南海トラフ大地震では、最大クラスの地震が発生した場合、県全域が震度7から6強の強い揺れに襲われると想定されています。

また、高齢者をターゲットにした振り込め詐欺、リフォーム詐欺などに見られる詐欺事件が社会問題化しています。無防備で孤独な老人を狙った犯罪は枚挙にいとまがなく、暮らしに一番身近な地域コミュニティが無関心であっては、問題は深刻化するばかりです。安全に安心して暮らすために、行政のみならず地域社会が一丸となって、ハードの面でもソフトの面でも、強い体制や仕組みをつくることが急務となっています。

⑺　豊かさの転換

経済成長が限界を迎え、社会の成熟化が進む中で、これまでのモノやお金に依存する価値観はゆるやかに薄れ、多様化しつつあります。東日本大震災の発生以降、ボランティアや町づくり活動に参加する人が増え、経済的、物質的な豊かさを重視する考え方から、地域社会とのつながりや豊かさを重視する方向に変化し、社会貢献欲求も高まりを見せています。

⑻　ICT（情報通信技術）の発達

情報通信基盤や通信網の整備を背景に、ICTはより速く大容量の情報交換を可能にし、私たちの暮らしに欠かせないものとなりました。佐川町でも無線インターネットが整備されるなど、情報通信インフラの整備も充実してきています。行政ではこれまでも、登録制の防災情報のメールの配信に取り組むなど町民サービス向上や事務の効率化に力を入れてきましたが、これまで以上に活用することが求められています。

しかし一方で、ICTは使い手と受け手の双方に一定のリテラシーを必要とし、使いこなせる人とそうでない人の生活の質の差をひらく技術だとも言い換えることができます。一方的にならないICTの運用が必要とされています。

⑼　環境配慮型社会への転換

地球温暖化をはじめとして世界規模での環境問題が深刻化する中で、二酸化炭素排出量の抑制やコンパクトで持続可能な町づくり,新たな再生可能エネルギーの活用など、環境配慮型の町づくりへの転換が求められています。佐川町においても、川や山など自然との触れ合いへの町民ニーズの増大もみられ、利便性と環境のバランスをとりながら生活の中で自然との共生を目指すことが重要です。

2. 佐川町の概況

(1) 位置と交通

佐川町は、高知県の中西部に位置し、高知市から約27㎞、車で1時間圏内の距離にあります。総面積は約101k㎡、周囲は越知町、津野町、須崎市、土佐市、日高村の5市町村に囲まれています。広域的に見ると、県都と愛媛県を結ぶ国道33号、山間部と太平洋を結ぶ国道494号とJR土讃線が交差する交通の要所でもあります。高吾北地域3町の中で最大の人口と財政規模を持ち、過疎化対策が課題である佐川町を含む佐川より西側の圏域の中でも、土佐市・高知市など都市側への出口にあり、人口流出を食い止めるダムの役割を果たすべき位置にあります。



(2) 自然

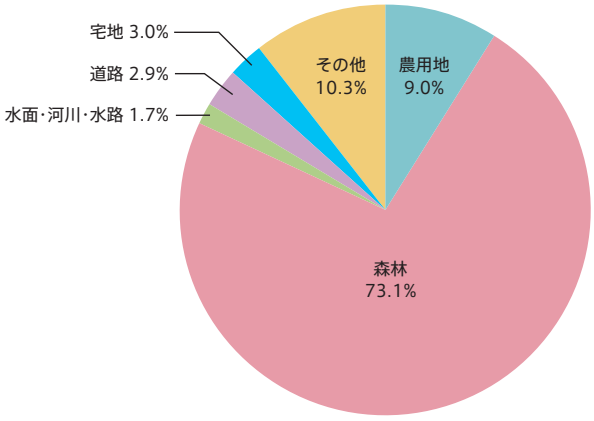
虚空蔵山(674.7m)や蟠蛇森(796.2m)などの山に囲まれた盆地状の地形で、町内が源流の柳瀬川などが北流し、仁淀川に合流しています。温暖多雨な気候ですが、冬季はしばしば降雪も見られ、春や秋に靄が発生することもあります。世界的な植物学者・牧野富太郎博士を育んだ、豊かでバラエティに富んだ自然がまだ残っています。

また、100年余り前、日本地質学の創始者と言われたドイツの地質学者エドモンド・ナウマンが佐川を訪れ、佐川が古生代から中生代にわたっての幅広い時代の地層が至るところに露出し、世界的に貴重な化石も産出されることから、地質学上とても重要な地であることを世界に紹介し、「地質のメッカ」としても知られるようになりました。

(3)　土地利用状況

佐川町の総面積は100.81㎢です。地目別に見ると約70%を森林が占めており、農用地9.0%、道路2.9%、宅地（住宅地、工業用地など）3.0%となっています。

地目別面積構成比



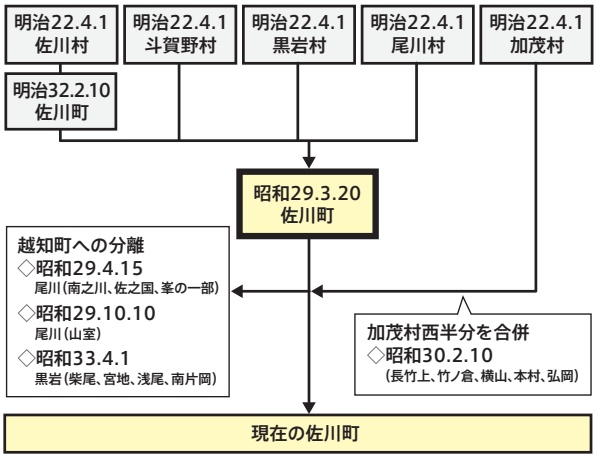
出典:総面積（国土交通省国土地理院）、その他の数値（県の土地利用現状把握調査）

(4) 歴史・文化

佐川の歴史は古く、不動ガ岩屋洞窟より出土した土器から、約1万2千年前（縄文時代）から人類が生活していたことが分かっています。文献で佐川の歴史が確認できるのは、南北朝動乱の時代になりますが、数カ所の遺跡や窯跡などから律令制度に組み込まれていく様子や、文化財として残る仏像などから当時の文化が佐川まで及んでいたことがしのばれます。

中世を経て、戦国時代（1467～1590年）に入り、後に土佐国を統一した長宗我部元親の重臣・久武親信が1573年、古城山に居城を移し佐川城としました。久武親信没後1603年には、関ヶ原の勲功により徳川家康から土佐24万石を賜った山内一豊に伴い入国した山内家の首席家老・深尾和泉守重良が、佐川1万石を預かることになります。以来12代270年間、明治維新に至るまでその城下である佐川に、封建文化の花を咲かせました。当時の文化的影響は、現在の佐川町にも色濃く残り、酒蔵を中心とした一帯の町並みや、名教館など文化・教育に重きを置く風土が築かれました。その環境は、明治維新期には田中光顕（1843～1939年）をはじめ多くの志士を輩出し、その後も牧野富太郎博士（1862～1957年）をはじめ、植物学、文学、芸術などあらゆる分野で多くの「文教人」を生み出してきました。

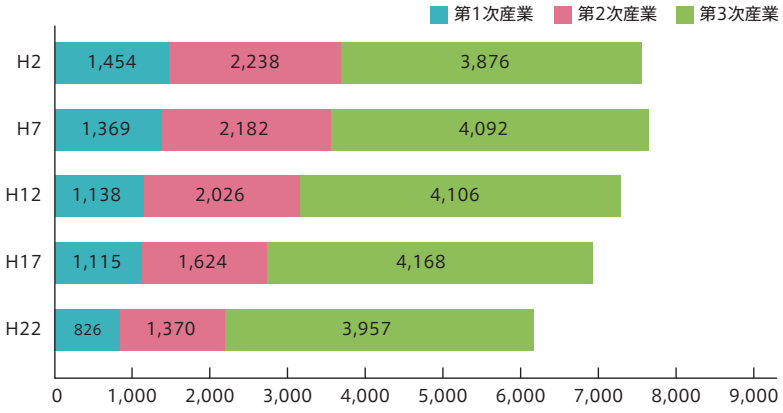
佐川町は、昭和29年に町村合併促進法の施行により、旧佐川町、斗賀野村、尾川村、黒岩村が合併し、さらに昭和30年に加茂村の一部を合併し発足、昭和33年の境界変更を経て、現在に至っています。



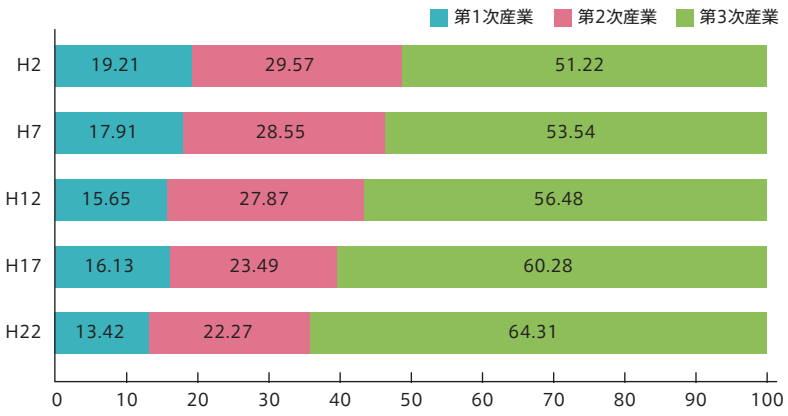
(5)　主要な産業

人口減少に伴い総就業者数も減少化が進み、平成12年から平成22年の10年間で1,117人減少し、6,153人にまで落ち込んでいます。第1次産業の就業者数は減少の一途をたどり、後継者不足に歯止めがかからない状況にあります。一方、就業人口に占める第3次産業就業者の構成比率は、年々増加しています。

産業別就業人口の推移（人）



産業別就業者構成比率の推移（%）

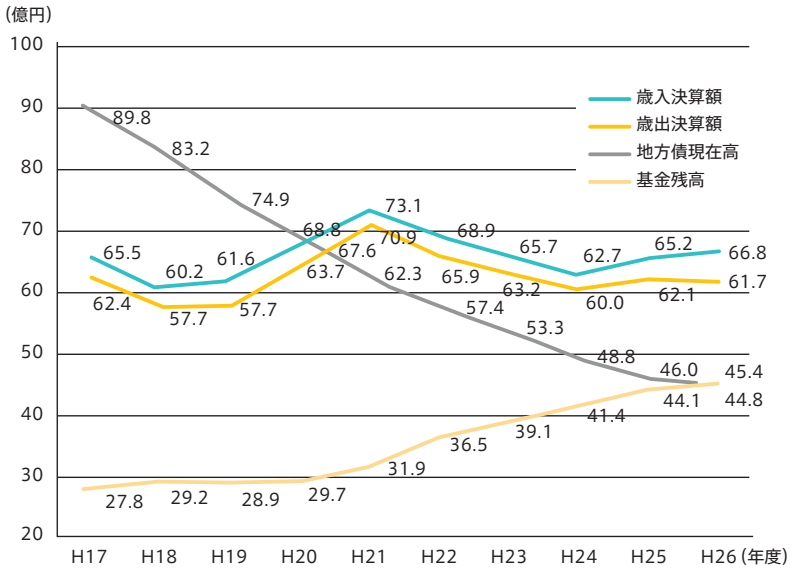


出典:平成22年国勢調査

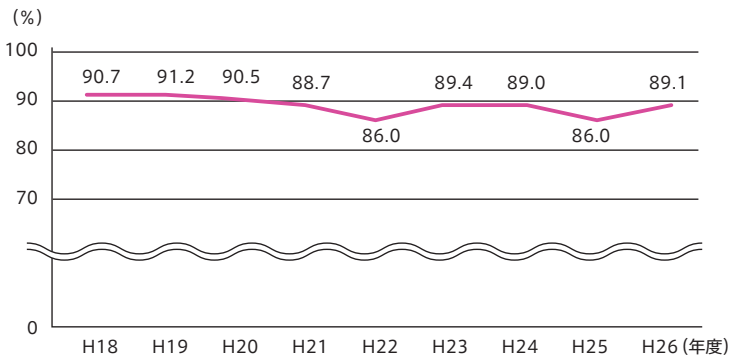
(6)　財政状況の推移

歳入歳出決算については、災害復旧や公共施設等のハード整備の事業量により変動がありますが、概ね60億円前後で推移しています。また、地方債残高（町の借金）は、近年の新規借入の抑制等により平成17年度をピークに年々、減少しています。一方、基金残高（町の預金）は年々、増加しています。経常的な歳入（税収、地方交付税など）に占める経常的な歳出（人件費、扶助費、公債費など）の割合を表す経常収支比率は90%前後で推移しています。

決算額等の推移



経常収支比率（%）

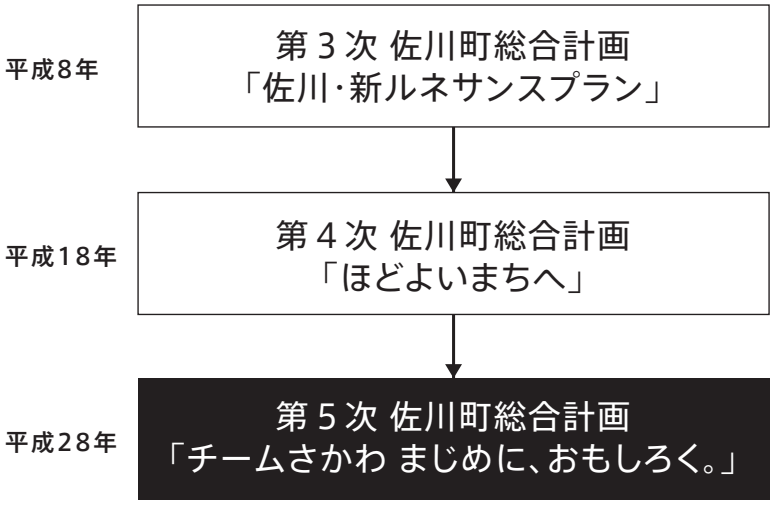


出典:決算統計の数値（一般会計、住宅新築資金貸付特別会計、学校給食特別会計）

(7)　計画と近年の取り組み

総合計画が初めてつくられた昭和50年からおよそ40年が経過しました。平成8年に策定された第3次総合計画「佐川・新ルネサンスプラン」は、まちの将来像を「人が集い活気みなぎる　うるわしき文教の町」と定め、新たな「文教の町」の創造を目指すものでした。これにより、桜座、スポーツパークなどを始めとした文教施設や町営住宅・農業集落排水施設などの整備、道路改良などが押し進められ、ハード面については一定の成果をあげました。しかしソフト面については、ハード面と比べると取り組みが十分とは言えず、それぞれの事業が単発で終結するなど、新しい展開へと繋がるまでに至りませんでした。

その後、平成18年に策定された第4次総合計画「ほどよいまちへ」では、前々回の計画の大きな課題であった町民との協働をより一層進めていくために『住みよい・住みたい ひととまち 新しい文教「ほどよいまち」へ』を目標に町づくりを進めてきました。この取り組みにより、集落活動センターの整備、自主防災組織の設立、ひろがれ協働の町づくり補助事業など、町民参加を押し進めるような場づくり、制度づくりが行われ、少しずつ行政・町民の間に協働と地域参画への意識が浸透し、地域コミュニティ向上のために地域で企画・立案する体制ができつつあります。しかし、前々回の計画と同様に、まだまだ計画自体の認知度が低く、充分に計画が活用されてきたとは言えませんでした。また、これまで以上に人口が減少する中で、新たな地域活動の担い手の発掘、育成が急務となってきています。



3. 佐川町民アンケート

町民の皆さんの想いを聴き、佐川町の抱える課題を探るために、平成26年6月から7月にかけアンケート調査を行いました。無作為に抽出した町民1,000名への調査票の郵送と、特設WEBサイトで回答を受付け、458名から返答を得ました。アンケートの質問項目は、町民の幸福度を調査するための質問項目と、10年前との比較分析を行うための10年前に実施したアンケートと同様の質問項目の、大きく2つの質問で構成されています。この調査結果を全国比較（幸福度調査のみ）、10年間の比較、地域間の比較、世代間の比較と4つの比較視点でみていきます。

(1) 佐川町の幸福度（全国比較）

① 地域しあわせ風土スコア

地域しあわせ風土調査の全国版では、全国15,000人を対象に各都道府県別に地域しあわせ風土スコアを測定し、数値（風スコア・土スコアの合計）が高い順にランキングにしました。佐川町の、地域しあわせ風土スコアは737.6（風467.6 ＋ 土270.0）と全国的にも高く、町民の総合的なしあわせ度は高いと言えます。

1	沖縄県	834
2	鹿児島県	738
3	熊本県	730
4	宮崎県	729
5	東京都	712
6	福岡県	703

←佐川町 737.6

7	兵庫県	689
8	長崎県	688
9	石川県	686
10	岩手県	680
11	長野県	670
12	静岡県	670
13	福井県	669
14	宮城県	668
15	高知県	667
16	佐賀県	665
17	鳥取県	664
18	滋賀県	664
19	島根県	663
20	山形県	663
21	大分県	662
22	北海道	658
23	山梨県	657

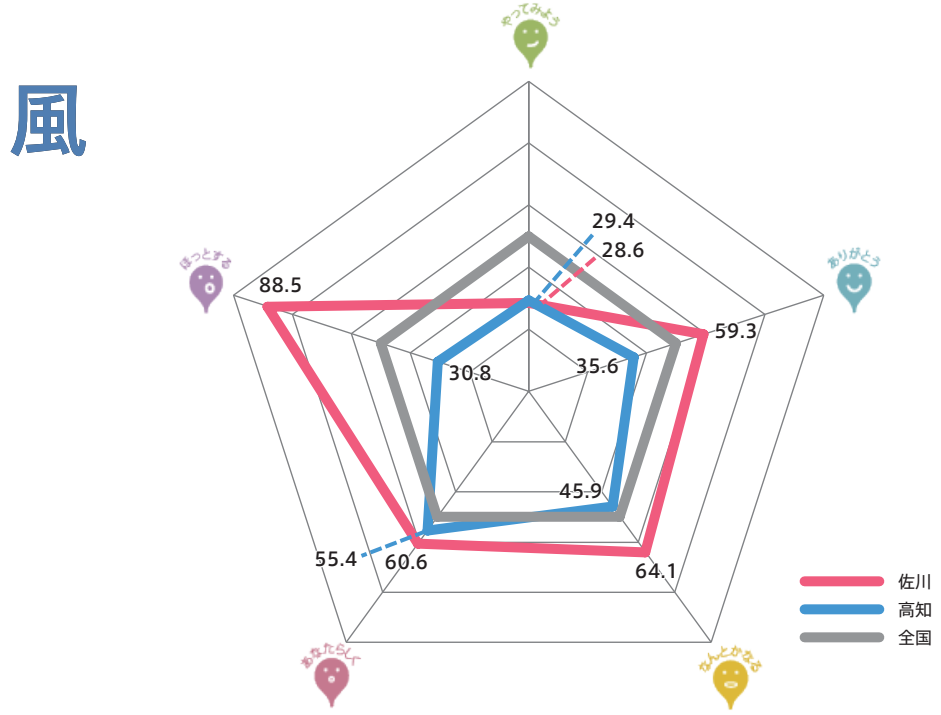
24	京都府	648
25	富山県	644
26	神奈川県	635
27	和歌山県	633
28	山口県	630
29	秋田県	630
30	広島県	630
31	千葉県	629
32	茨城県	628
33	岡山県	627
34	三重県	624
35	徳島県	619
36	大阪府	610

37	栃木県	609
38	奈良県	606
39	青森県	605
40	埼玉県	604
41	愛媛県	602
42	愛知県	598
43	香川県	595
44	岐阜県	594
45	新潟県	592
46	福島県	583
47	群馬県	577

- 700以上
- 650～700未満
- 610～650未満
- 610未満

② 個人が感じるしあわせな気持ち「風スコア」

その土地で暮らしている個人が感じるしあわせな気持ちを測定したものが、風スコアです。下図の五角形は、47都道府県の「風スコア」「土スコア」、それぞれの5指標の平均値を50としたときの、高知県と佐川町、それぞれの指標の偏差値です。佐川町の風スコアは全体的に偏差値が高めですが、「やってみよう」因子のみ、全国と高知県を下回っています。新しいことにチャレンジしていく気運をつくることが、佐川町民の幸福度向上につながりそうです。



[風]10の質問

やってみよう指標
1. 得意としていることがある
2. 何か、目的・目標を持ってやっていることがある

ありがとう指標
3. 人を喜ばせることが好きだ
4. いろいろなことに感謝するほうだ

なんとかなる指標
5. いまかかえている問題はだいたいなんとかなると思う
6. 失敗やいやなことに対し、あまりくよくよしない

あなたらしく指標
7. 自分と他人をあまり比べないほうだ
8. 他人の目を気にせずに、自分がやるべきだと思うことはやる

ほっとする指標
9. 現在の暮らしや、自分の将来への不安は少ないほうだ
10. 自分は安全な生活を送っていると思う

※風スコアの算出方法
上記10の質問の5段階評価（非常によくあてはまる、少し当てはまる、どちらともいえない、あまり当てはまらない、全く当てはまらない）トップ2ボックスの合計パーセントを全て足しあげて（非常によくあてはまる＋少し当てはまる）算出。

③ しあわせな気持ちを育む「土スコア」

地域に個人がしあわせな気持ち（風）を感じることを後押しする土壌が育まれているかどうかを測定するのが土スコアです。佐川町はきれいな五角形に近く、バランスのとれた土壌が育まれているようです。ただし「あなたらしく」と「なんとかなる」のみ高知県全体の偏差値を下回っています。他人との違いや挑戦、失敗を地域が受け入れる、懐の広い地域にしていくことが、町民にやや不足している「やってみよう」の気持ちを育む土台となりそうです。

土



［土］10の質問

やってみよう指標

1. 自分の好きなこと、得意なことに熱中している人が多い地域性、風土
2. 目標を持って頑張る人を応援する地域性、風土

ありがとう指標

3. 助け合いや感謝の気持ちを大切にする地域性、風土
4. 人間関係が豊かで、挨拶や笑顔あふれる地域性、風土

なんとかなる指標

5. 挑戦することを応援し、失敗を許容する地域性、風土
6. 楽観的、前向きな地域性、風土

あなたらしく指標

7. 人と違うこと、個性を大切にする地域性、風土
8. よそもの、若者、マイノリテイなど多様な人を受け入れる地域性

風土ほっとする指標

9. 食べものや、住まいには困らない地域性、風土
10. 身の危険を感じず、安全に暮らせる地域性、風土

※土スコアの算出方法
上記10の質問の5段階評価（非常によくあてはまる、少し当てはまる、どちらともいえない、あまり当てはまらない、全く当てはまらない）トップ2ボックスの合計パーセントを全て足しあげて（非常によくあてはまる＋少し当てはまる）算出。

④ 地域のインフラや環境に関する充実度

しあわせ感じる町民（風スコア）を増やし、こうした気持ちを後押しする地域性（土スコア）を強化するために何が必要なのかを探るため、地域を構成する地域エレメント40項目（地域環境、インフラ、行政サービスなど地域を40項目）としあわせ風土スコアとの関係性を、全国を対象にした調査を元に分析したものが下記表です。

「風」スコアと相関係数の高かった上位5項目（地域エレメント40項目中）

やってみようスコア		ありがとうスコア		なんとかなるスコア		あなたらしくスコア		ほっとするスコア	
1 公民館	0.331	1 地域の知名度	0.391	1 景観・まちなみ	0.471	1 お祭り・イベント	0.320	1 娯楽施設・制度	0.596
2 地域の知名度	0.325	2 国際性	0.362	2 地域の知名度	0.441	2 地域の知名度	0.306	2 地域活動の機会・制度	0.593
3 地域活動の機会・制度	0.300	3 景観・まちなみ	0.329	3 治安・犯罪防止	0.423	3 景観・まちなみ	0.185	3 公園・運動施設	0.573
4 国際性	0.294	4 地域活動の機会・制度	0.293	4 自治体の情報提供	0.408	4 娯楽施設・制度	0.179	4 景観・まちなみ	0.569
5 公園・運動施設	0.291	5 公民館	0.265	5 地域活動の機会・制度	0.404	5 商店街・中心市街地	0.155	5 自治体の情報提供	0.568

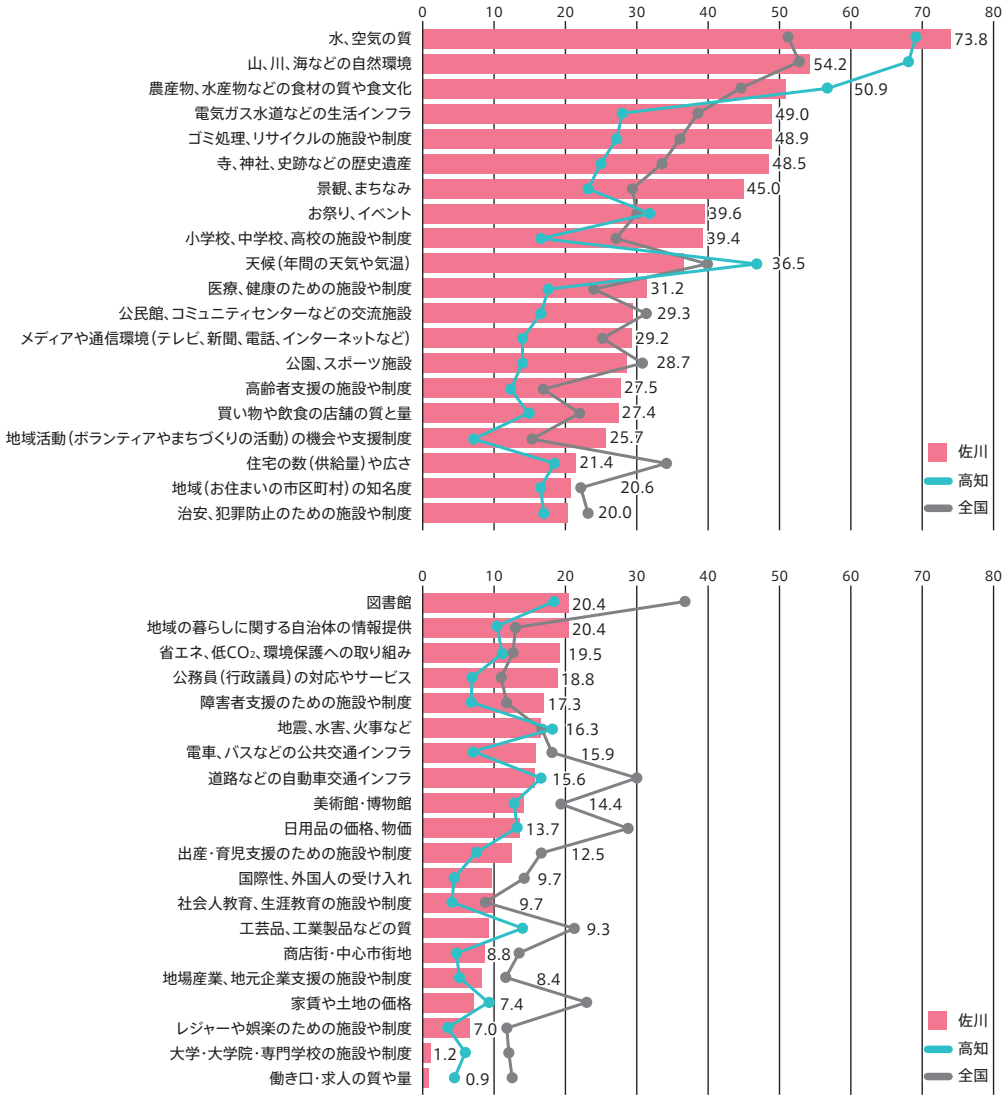
「土」スコアと相関係数の高かった上位5項目（地域エレメント40項目中）

やってみようスコア		ありがとうスコア		なんとかなるスコア		あなたらしくスコア		ほっとするスコア	
1 飲食・買い物店舗	0.804	1 水・空気の質	0.426	1 娯楽施設・制度	0.602	1 商店街・中心市街地	0.801	1 食材の質・食文化	0.691
2 地域活動の機会・制度	0.803	2 食材の質・食文化	0.412	2 商店街・中心市街地	0.595	2 娯楽施設・制度	0.799	2 水・空気の質	0.580
3 商店街・中心市街地	0.796	3 自然環境	0.400	3 飲食・買い物店舗	0.584	3 国際性	0.795	3 治安・犯罪防止	0.574
4 娯楽施設・制度	0.793	4 治安・犯罪防止	0.371	4 国際性	0.584	4 飲食・買い物店舗	0.793	4 ものづくりの質	0.569
5 自治体の情報提供	0.774	5 ものづくりの質	0.351	5 地域の知名度	0.558	5 公共交通インフラ	0.764	5 自然環境	0.539

佐川町は個人の感じる（風）「やってみよう」スコアが低めでした。上図によると、地域活動の場所が整備され、地域で活躍できる機会に恵まれたブランド力があるオープンな町に「やってみよう」の風が吹きやすいようです。佐川町の場合は「地域活動の機会・制度」以外の4項目が全国平均を下回っています（次ページ図）。地域活動の場の整備や外国人を含めたヨソモノを受け入れられる文化が個人のしあわせにもつながりそうです。

『「土」スコアと相関係数の高かった上位5項目』の表の中では、佐川町が高知県の偏差値を下回った「なんとかなる」「あなたらしく」の部分をみていきます。「娯楽施設・制度」「商店街・中心市街地の活性化」「飲食・買い物店舗」「国際性」の4つが「なんとかなる」「あなたらしく」と相関係数の高い共通項目としてあがってきています。自分らしく前向きに過ごしている人が多い地域では、食・娯楽・買い物の場と開かれた地域性が充実していると言えそうです。

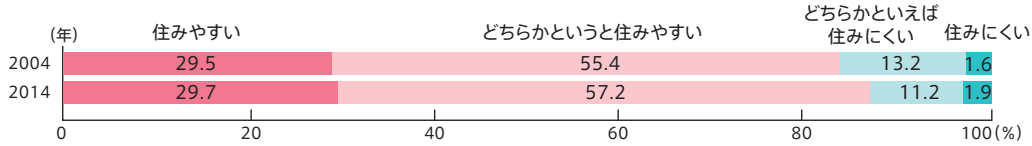
地域エレメント40項目の充実度（全国・高知・佐川）



(2)　10年間の比較

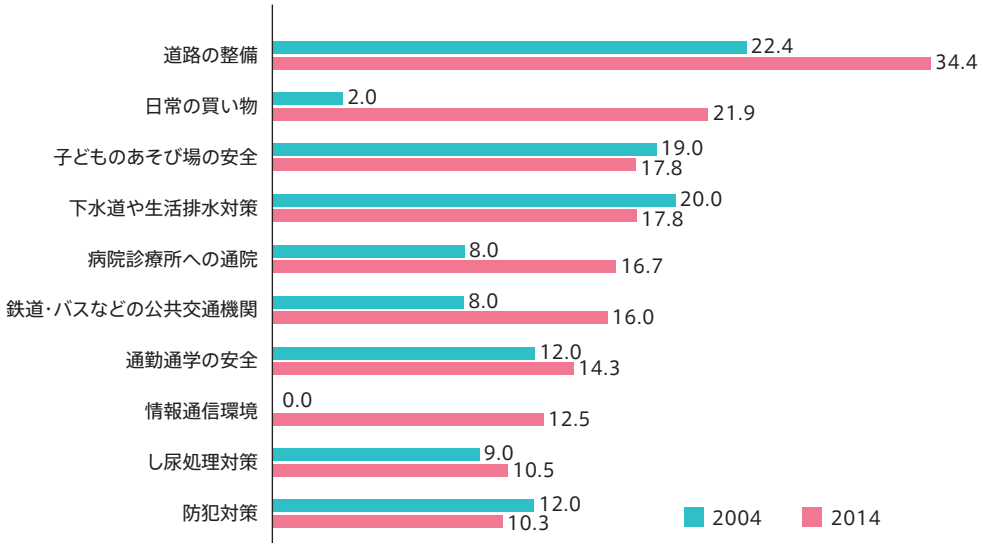
① 佐川町の住み心地

佐川町の住み心地に関して、「住みやすい」「どちらかというと住みやすい」「どちらかといえば住みにくい」「住みにくい」の4つの選択肢の中から当てはまるものを選んでもらいました。「住みやすい」「どちらかというと住みやすい」を合わせると9割に近い町民が住みやすいと答えており、10年前と現在とで、変化はほとんどありません。



② 佐川町で不満があること

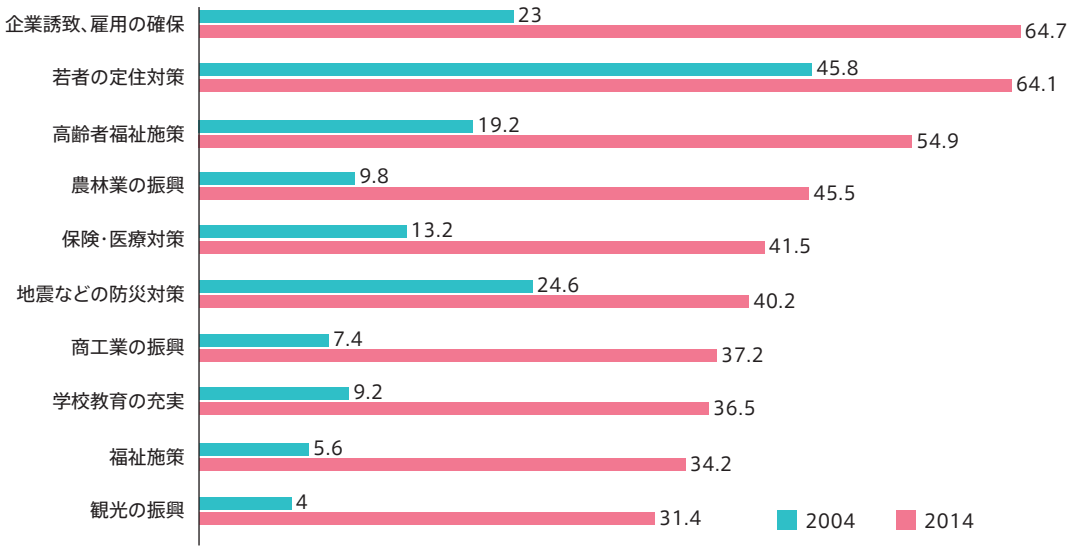
住んでいる地区の生活環境で、選択肢の中から不満だと思うものを選んでもらいました（複数回答可）。特に日常の買い物および移動（道路の整備、公共交通機関、病院への通院、通勤通学）面の不満度が高いようです。高齢化率の上昇にともない、高齢となっても地域で自立した生活を送っていける生活インフラへの期待が高まっているようです。



※2014年の不満率が高かった上位10項目のみ選抜して掲載

③ 佐川町が今後10年間力を入れるべきポイント

選択肢の中から、特に今後10年間、町として力を入れるべきだと思うものを選んでもらいました（複数回答可）。10年前のアンケートでは、複数回答可ではなく、2つまでの選択回答だったので、その点を考慮すべきではありますが、10年前と比べ、雇用・産業・福祉面を中心に「力をいれるべき」が高まっています。特に、雇用の確保、若者の定住対策など、若者が住み、働き続けられるような環境づくりが求められています。

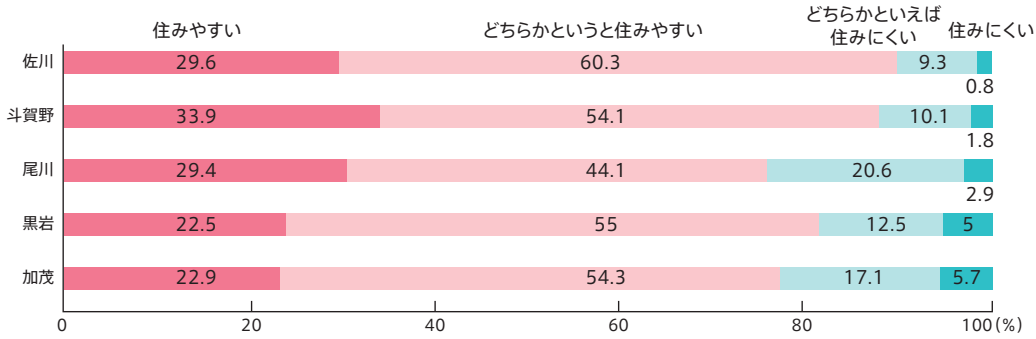


※2014年の力を入れるべきポイント上位10項目のみ選抜して掲載

(3)　地域間の比較

① 佐川町の住み心地

佐川・斗賀野地区で住みやすいという回答が9割近いのに対して、尾川・黒岩・加茂地区では7割程度にとどまります。



② 佐川町で不満があること

斗賀野地区では買い物、尾川・黒岩・加茂地区では交通面（道路の整備、通院、通勤通学）の不満度が高くなっています。生活の利便性の面では、5地域間の格差があるようです。

全体より
10%以上高い　5%以上高い
5%以上低い　10%以上低い

	全体	佐川	斗賀野	尾川・黒岩・加茂
道路の整備	34.4	31.6	26.6	47.1
日常の買い物	21.9	8.5	39.4	33.3
下水道や生活排水対策	17.8	19.2	11.0	21.6
子どもの遊び場の安全	17.8	21.4	11.9	16.7
病院診療所への通院	16.7	9.0	12.8	37.3
鉄道・バスなどの公共交通機関	16.0	14.5	14.7	22.5
情報通信環境	12.5	11.5	7.3	20.6
し尿処理対策	8.1	10.3	1.8	10.8
通勤通学の便利さ	7.7	4.7	10.1	12.7

※全体より評価に5%以上差がある項目のみ抜粋して掲載

③ 佐川町が今後10年間力を入れるべきポイント

斗賀野地区では農林業等の産業、学校教育、環境保護やコミュニティ面に力をいれるべきだという意見が強いようです。尾川･黒岩･加茂地区でも同じく農林業等の産業と学校教育、そして不満度の高かった交通面での改善を求める声が強くなっています。

全体より
10%以上高い　5%以上高い
5%以上低い　10%以上低い

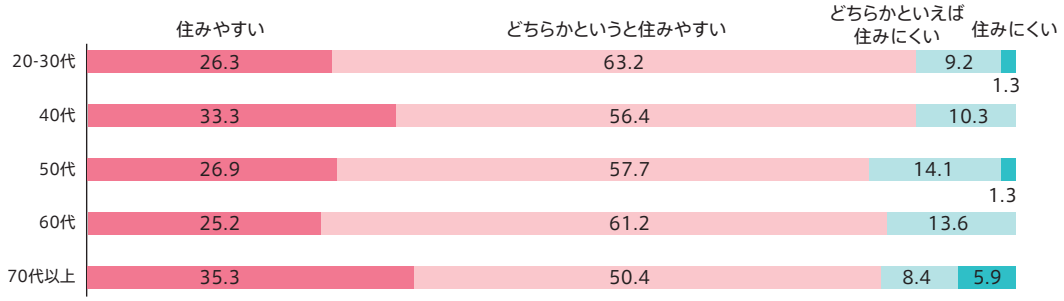
	全体	佐川	斗賀野	尾川･黒岩･加茂
高齢者福祉施策	54.9	58.8	51.4	48.1
農林業の振興	45.5	38.7	50.5	53.8
学校教育の充実	36.5	32.9	42.1	41.5
心身障害者、児童、母子などの福祉施策	34.2	38.3	38.3	19.8
観光の振興	31.4	35.8	29.0	26.4
道路交通網の整備	23.5	22.2	17.8	30.2
環境対策	21.2	21.8	26.2	15.1
交通安全対策	20.5	24.3	22.4	11.3
自然保護対策	20.1	18.9	28.0	14.2
防犯、風紀対策	19.9	22.6	23.4	12.3
ゴミ、リサイクル対策	18.8	20.2	22.4	11.3
コミュニティの活性化対策	17.3	14.4	24.3	18.9
公営住宅などの居住環境の整備	16.2	13.2	23.4	17.0
町外、国外交流	14.7	17.3	9.3	15.1

※全体より評価に5%以上差がある項目のみ抜粋して掲載

(4)　世代間の比較

①佐川町の住み心地

住み心地の良さは年代によっては10%以上のひらきがあり、世代差は大きいようです。40代と70代以上で高いものの、50-60代で落ち込む傾向にあります。



②佐川町で不満があること

20-40代は、「子どもの遊び場の安全」「通勤通学の安全」「学校などの教育」「こどもを育てる環境」など、子育てに関わる項目に不満が高いようです。60-70代は「日常の買い物」「道路の整備」「通院」など、移動に関わる項目が高くなっています。

全体より
10%以上高い　5%以上高い
5%以上低い　10%以上低い

	全体	20-30代	40代	50代	60代	70代以上
道路の整備	34.4	28.4	33.3	26.3	43.4	33.3
日常の買い物	21.9	18.9	25.6	17.1	18.2	29.7
下水道や生活排水対策	17.8	10.8	9.0	23.7	24.2	18.0
子どもの遊び場の安全	17.8	25.7	34.6	13.2	12.1	8.1
病院診療所への通院	16.7	16.2	9.0	17.1	11.1	25.2
通勤通学の安全	14.3	28.4	20.5	18.4	5.1	7.2
情報通信環境	12.5	16.2	23.1	9.2	13.1	5.4
学校等の教育	10.5	16.2	21.8	7.9	6.1	4.5
防犯対策	10.3	9.5	14.1	10.5	14.1	4.5
子どもを育てる環境	9.2	17.6	15.4	7.9	8.1	1.8
し尿処理対策	8.1	2.7	7.7	5.3	13.1	10.8
上水道や井戸水対策	7.7	5.4	2.6	10.5	9.1	10.8
ゴミ処理対策	6.4	5.4	1.3	9.2	8.1	7.2

※全体より評価に5%以上差がある項目のみ抜粋して掲載

③ 佐川町が今後10年間力を入れるべきポイント

20-40代では、子育てなどの福祉施策や教育、居住環境の整備、そしてスポーツの振興やコミュニティの活性化など地域活動に関わる項目の充実を求める声が他世代よりも高いようです。50-60代では、雇用の確保、農林業の振興、若者の定住対策などの項目が高く、子育てが一段落し、成長した子どもたちが佐川で住み働ける場所を得られるよう、その充実を求めていると推測できます。70代以上では、高齢者の福祉施策の充実、消費者保護対策など、自分自身が直面している、あるいは今後直面する問題への対策を望んでいるようです。

全体より
10%以上高い　5%以上高い
5%以上低い　10%以上低い

	全体	20-30代	40代	50代	60代	70代以上
企業誘致、雇用の確保	64.7	52.0	63.3	71.3	70.9	62.2
若者の定住対策	64.1	64.0	59.5	63.8	70.9	62.2
高齢者福祉施策	54.9	38.7	50.6	55.0	56.3	65.8
農林業の振興	45.5	34.7	41.8	41.3	50.5	52.3
地震などの防災対策	40.2	37.3	40.5	38.8	37.9	45.9
学校教育の充実	36.5	38.7	46.8	32.5	38.8	30.6
心身障害者、児童、母子などの福祉施策	34.2	42.7	39.2	27.5	28.2	34.2
観光の振興	31.4	38.7	30.4	32.5	31.1	28.8
道路交通網の整備	23.5	17.3	22.8	21.3	25.2	27.0
環境対策	21.2	9.3	21.5	25.0	22.3	26.1
教育施設の充実	20.7	26.7	29.1	18.8	14.6	19.8
生活排水対策	20.7	12.0	13.9	21.3	26.2	26.1
交通安全対策	20.5	16.0	22.8	22.5	11.7	28.8
自然保護対策	20.1	17.3	20.3	13.8	21.4	24.3
防犯、風紀対策	19.9	16.0	25.3	18.8	17.5	23.4
町の景観づくり	19.9	22.7	21.5	17.5	15.5	25.2
下水道の整備	19.2	14.7	15.2	18.8	27.2	18.0
ゴミ、リサイクル対策	18.8	9.3	12.7	20.0	23.3	24.3
スポーツの振興	18.8	32.0	27.8	16.3	11.7	15.3
地域文化の振興	18.8	18.7	20.3	17.5	18.4	22.5
行政のスリム化	18.6	17.3	17.7	11.3	20.4	23.4
情報公開	17.5	9.3	20.3	11.3	18.4	24.3
コミュニティの活性化対策	17.3	20.0	25.3	20.0	16.5	11.7
公営住宅などの居住環境の整備	16.2	21.3	22.8	12.5	13.6	12.6
消費者保護対策	16.0	12.0	10.1	11.3	13.6	27.9
町外、国外交流	14.7	13.3	20.3	13.8	14.6	14.4
情報化社会への対応	13.0	12.0	19.0	12.5	11.7	13.5
消防などの防火対策	12.2	8.0	11.4	7.5	9.7	19.8
上水道の整備	10.3	5.3	11.4	8.8	12.6	13.5

※全体より評価に5%以上差がある項目のみ抜粋して掲載

4. 佐川のまちの声

農業を担う若者、子育て中のママ、Iターン、Uターン、地域活動家…。得意な分野も違えば、興味の範囲も考え方も違う、たくさんの人々が佐川町で暮らしています。選択肢から選ぶだけのアンケートでは拾え切れない声を、より深く探るために、一人ひとりの声や考えに向き合い、耳を傾けるヒアリングやワークショップなどの機会を多く持ちました。ヒアリングでは、年齢や性別、職業、活動内容などを踏まえ、41組の町民の皆さんに個別に時間を頂き、活動されていることのお話、暮らすなかで感じる佐川町の課題、佐川町の未来に期待すること、どんな総合計画であれば読みたいと思うか、など町への想いをお聞きしました。以下に示すのはこのヒアリングと、町民アンケートの中の自由回答（どんな佐川町になってほしいか）、ワークショップに参加して頂いた方から聞き取った町民の皆さんの声です。

林業について

「大切に手入れしてきた山を息子さんにいらんと言われて、全部木を伐採してしまわれた方もいました。山に間伐などの手入れが必要なことを知らずに、自分の持ち山を宝の山だと信じて、一切触ってくれるなという方もいます。手入れをしないと荒れていく一方なのに勿体ない。そうした方々をうまくサポートできるようになりたい。」

「山の仕事は、僕たちがしたことが、100年先、200年先まで残って、それがビジネスにもなり、自然も守られていく。すごく魅力ある仕事だと思うんです。」

「一個人で林業を始めるには、初期投資にかかるお金が障壁。林業に必要な機械、ユンボは、1トンにつき100万円が相場です。僕が持っているのは3.5トンだから本来なら350万円。中古で120万円で手に入れましたが、それにしても大きな買い物です。」

「佐川町を、自伐型林業で伝説の町にしたいですね。」

農業について

「いいものをつくることにこだわる農家は多いが、売ることも合わせて設計できる人は少ない。JAを責めるばかりではなく、自分らで考えんと。」

「農業は風土産業。その土地の気候や風土があって、そこに合ったものがつくられる。県全体にも言えることですが、土地柄、大規模化が難しい。だけど『はちきん』などの店へ行くと、いろんな種類の野菜が出ています。それをどう組み合わせて出していくか。」

「ブランド力を将来につなぐには、地区全体で、ある程度の数を出荷できることが前提。今黒岩に22軒ある梨農家のほとんどは跡継ぎがいない。いまは、自分と同世代の跡を継ぐかどうか迷っている子たちに一緒にやろうと声をかけてまわっています。」

「2014年は、お米が前年より2000円安くなり、来年はさらに下がる。オーナーが収穫分すべてを買い取り、作業費として賃金を支払う受委託や、利子なしでお米をつくる受け刈りなどの方法もありますが、赤字になるならいずれにしても長くは続けられない。」

「佐川は広い耕作面積が取りにくく、流通においても不利。だからこそ組織の力が大切。」

「農業をやりながら自分たちで加工販売までを行うには、相当の労力がかかる。本業が忙しくなると、思うようにやりたいことが進められないのが悩みです。」

「やっぱり一から農業をはじめた親父たちの世代はすごい。経験と人のつながりが違うし、いつもビジョンを持て、10年先を見て行動しないかんと言われています。」

「仕事を継いだのは、親父が仕事の愚痴を全く言わなかったのが大きかったかな。」

「農業で生活でき、田んぼや畑が荒れ地になってないことを望みます。」

「私の息子も農家の長男として生まれ、農業をしたいと思っています。しかし、農業切捨て国政、町政。これでは、後継者も育たないし、若者はどんどん佐川を離れ、ますます高齢化となります。まずは佐川町から。いつの日か息子に胸張って農業経営をバトンタッチ出来る日を夢見て、今から子どものように楽しみにしています。」

新規事業の開発について

「今は自分たちがしよることが特別のように言われるけんど、もっとみんなが新しいことにトライできたら。本業を頑張るのもえいことやけど。いろんなことにチャレンジできるような空気が生まれたら、町がもっと楽しいことになるんじゃないやろうか。」

「若者の多くが「安定した生活」だけを求めて公務員等を目指したりせず、それぞれの適性に応じた仕事を前向きに選べることができる町であってほしい。」

「佐川町って、わりと保守的で新しいことをやろうという雰囲気が薄いですよね。でも何か一つ、突き抜けるような面白い動きがあったらみんなで盛り上がれるんじゃないかな。いきなり変化を求めても駄目で、ゆっくり変わればいいとは思うんだけど。」

「さかわはいつも後だしじゃんけんやきね。安定を覚えてるから、危機が少ない。すごいおとなしい。商売っけがないというか。」

「一人ひとりが夢を持てる町にしたい。皆が色んなことに挑戦でき、挑戦して、幸せを感じる町に。」

地域性について

◎斗賀野

「斗賀野はもともと地域活動の盛んな場所。よそから移住してきた人たちを仲間に入れるのがうまい。例えば、とかの元気村は祭りの実施や地域福祉の運営など地域に根ざしたNPOですが、元々いた人たちに加えて移住者も数多く関わっています。」

「斗賀野は、自分たちの世代の横のつながりはありますが、縦のつながりがまだ少ない。若い人たちと何か楽しいことができんかなと思っています。」

「斗賀野には多様な世代の人たちが楽しめる、多様なコミュニティやイベントがある。地域は無理にまとめようとしてもだめ。みんながそれぞれの得意分野を活かしながら、活躍できる場をつくるのがコツ。」

「平成17年に始まったほ場整備の関係でこの地域で何度も話し合いが行われた。土地改良をみんなで推進して来て、さあハードが整ったぞ、と。そこで今度は、もっと斗賀野をよくするために、ソフト面を充実させようという流れでとかの元気村がはじまった。」

◎尾川

「尾川は人と人とのつながりが深いというか、人間があたたかいよねぇ。地形的な一本道のせいかもしれん。朝晩必ず誰かに会うからね。」

「10年ほど前まで尾川地区で行われていた、地区民の運動会が忘れられない。子どもからお年寄りまでみんなで盛り上がれるイベントだった。あの楽しさをもう一度味わいたい。いつか再開できたら。」

「尾川は集落みんなが家族のように暮らしています。今、自分の子どもを実家へ連れていくと、尾川のみんなが知ってくれちょって声をかけてくれます。そういうあったかい感じがすごく好き。」

「尾川は今、50代以上の世代が元気で、地域の活動も中心になって進めてくれている。けれどゆくゆく、自分たちの世代が引っ張っていかなければならなる。その時は尾川だけでなく、きっといろんな人の力を借りなければならない。だから今、町内のさまざまな人たちと関係を築いておくことが、大切なのかなと思っています。」

「今力を入れているのが「尾川おどり」の継承。子どもの頃はおばあさんやお母さんが毎年夏祭りの時に踊っていた。でも、後継者不足で踊られなくなって40年近くがたって。6年前に復活させたこの踊りを、子ども達に受け継いでいきたい。」

◎黒岩

「黒岩はそれぞれががんばりゆうきねぇ。部分部分になっていて、パイプ役がおらん。そこをつなげるのを今、がんばっている。みんな自分のやりいうことが一番やというプライドがあるから、難しいね。」

「小学校の卒業式に行ったら、卒業する女の子の一人が、小学校の前で将来、駄菓子屋をやりたいという話をしていて。この地域のことが好きで、そういってくれる子がいて、涙がでそうになるくらいうれしかった。その子たちが帰ってこられるような地域を、みんなで守っていかないかんね。」

「いっぺんに人を巻き込むのは無理。少しずつ、端の方からつないでいかんと。」

「こだわり派が多いよね。自分のとこはこう、という。」

「多様な人が地域に関わっているのが強みかな。他の地域は顔ぶれがだいたいおなじ感じがするけど。若い農家の後継者が多いのも理由のひとつかも知れん。」

「地区民運動会が元気。この狭いエリアで７つもチームができる。７つやで。」

「50代、60代の独身男性が多い。30代の若い独身男性も多いけど。若い子たちは農業をやっているから、出会う機会がないよね。農家を継ぐ前にお嫁さんをつれてきてたらいいけど、農家を継いでからだともっと難しくなる。」

「イベントは多いね。無形文化財も２つあるし。」

「黒岩は気のええ人らが多いからね、頼っていったらええのよ。助けてくださいって、ほめておだてて、少しずつ助けてもらう。」

◎**加茂**

「加茂は一番市内に近いということもあって、高知市のベットタウンになってる。インフラの面では充実しているし、土地も広い。だから地域としての危機感みたいなものはちょっと薄いかもしれない。」

「他の地域に比べて経済的に豊かな人が多い気がする。公務員が多いかな。」

「そういう意味では、外に稼ぎにでている人たちが多いからか、地域に関わっている人の数もあんまり多くない。他の地域に比べてつながりが希薄。」

「子ども達は素直で明るし、その保護者もいい人が多い。」

「加茂の本村というエリアでは移住者が増えてるんだよね。移住者が移住者呼ぶ、というかたちで。」

「移住者が増えているのはいいことだけど、昔から加茂にすんでいる人と新しく移住して来たひととではやっぱりどこか分かり合えない。そこは難しいよね。」

「加茂の人は優しくってふんわりしてるなぁ。まじめで控えめなタイプ。」

◎**佐川**

「佐川は交流人口も多いし、課題が多すぎて何から取り組むかでまず意見が割れる。他の地域は人数が少ない分、課題をみんなで合意してまとまって行動しやすい。」

地域コミュニティについて

「会議に集まる人が同じ顔ぶれになってきちょる。若い人はあまり参加せんし。若い人が外に出んでもいいくらい地元に仕事があったらいいのやけどね。」

「やっぱり人とのつながりが大事。助けたり助けられたりで、無理言える相手をいっぱいつくっちょかんと。例えば、子どもが喧嘩して相手の子を怪我させても、親同士が仲良くしていれば、大きな問題にならんでしょう。」

「佐川の人たちってすごく親切で、おいしかったからみんなに宣伝しておくよって大量に買い込んでくださる方がいたりするんです。」

「青年部の活動自体はすごくええこと。そやけど、青年部が単なるボランティア団体やイベント屋になるのは少し違う。本来青年部は、仕事のことを相談したり、商売に役立つ情報を共有する組織。やっぱり俺ら

はみんな商売人。自分ところが厳しいときに無理してボランティアしてくれよる人らもおる。これが行き過ぎたら、心が萎えていきます。」

「いまの退職世代のつながりは強い。その世代がいま地域を支えています。ただ、その下に続く40歳、50歳が少し消極的なように思います。この世代が支える時代になったときに、困らないようにこの世代のつながりを強くする必要があると感じています。」

「勤め人が増えたでねぇ。若い子は日中全部市内に出て行くから、接点がなくて。」

「男性は仕事をやめたあとに地域の中になかなかすっとはいれないんですよね。定年して、地域の中にタイミングをのがして、孤立する。」

「住む人が佐川のことをよく知っている町であってほしい。」

「男性がいっぱい集まるサロンがある町にしたいですね。」

役場について

「最近の佐川町役場は、行きやすくなったね。職員も明るくなったんじゃないろうか。」

「昔、花園保育園でやりよった『お化けの夏祭り』なんか、町民にはえらい人気で盛り上がっちょった。今はなくなって残念に思う。」

「人と人の輪が薄くなってきています。町民が考えることは当然ですが、行政としても、どうすれば人と人を結びつけることが出来るかを考えることが必要ではないでしょうか。人と人が結びつけば、自ずとまちの課題は解決されると思います。」

人づくりについて

「佐川へ戻った際、ずいぶん町が寂しくなったと感じたんですよ。町の魅力って何だろう、と。思い至ったのは“人”。自分が面白いと思う人を引き合わせたり、刺激する場をつくっていくこと。それをこれから佐川でやったらいいんじゃないか、と思いました。」

「東京は、遊ぶのには楽しかったですよ。ただ、ずっと暮らすところじゃないなと思いました。なんぼ働いても、結局自分のためか会社のためでしょう。それやったら、もっと家族とか地域のことに時間を使うような生き方のほうがええなと思ってね。」

「人って頼りにされたり、心をこめてやっていることを褒められると嬉しいもの。そこにどうスイッチを入れて、楽しく参加してもらうか。人はつながり合うと変な勇気が出て、新しいことをやってみようと力が湧きます。そんなきっかけをたくさんつくれたら。」

「やっぱり自分が歳とった時に、周囲の人たちと支え合って楽しく暮らせたらいいなと。人の輪をつくっていくにはものすごく時間がかかるんです。人はすぐに成果を求めがちだけど、うまくいっているところほど、人づくりに時間をかけていますよね。」

「やっぱりね、町づくりは人づくりよ。時間がかかる。だから遊びもって楽しくやらんと、長続きせんもんね。」

「上からモノを言うことはしないようにしようと。いろんなタイプの先輩方を見てきて、やっぱり話がしやすい人でありたいと思いました。何かを決める時はみんなで決める。」

「その人をちゃんとみて、性格的にはどうだっていうのを分析する。おしつけにならんように、どこをくすぐられたら頑張るのかポイントを探る。ささやかなことでも評価されたら、誰だって嬉しいじゃないですか。誰々が喜んでいましたよと伝えるだけで、うれしくなって、頑張ろうと思える。」

「佐川町には沢山の有能な人材が埋もれています。まずは地域に参加できるような環境づくりが大事。」

「何かのリーダーをやっている人が多い地域をまとめる人は、中間のひとでないといかん。色がついていなくて、誰にも嫌われていない、中立な立場で話ができる人でないと。」

町づくりについて

「女の人がいきいきと働きながら子育てができて、退職後も長生きできる町になるといいなと思います。町と一緒に活動しているうちに、女性もいろんな場に参画する機会が増え、声をあげていくことができる。大事なのは、町に何かを期待するのではなく、まず自分が何をできるかを考えること。」

「便利さだけを求めるのではなく、子供、高齢者が住みよいと感じる町づくりと、町民一人ひとりが何かに参加できるような、小さな目標づくりをしていってほしい。町づくりに少しでも参加したいと思っています。」

「町民一人ひとりが知恵とアイデアを出し合える世代間交流の場を多くつくり、楽しみながら支え合えれば、元気で明るい町づくりが出来るのではと思います。」

「自分たちが無理なくできる活動にしないと続かない。みんなが楽しくいきいきと、来れるときに参加して。義務的になると楽しくないからね。」

「皆に出番がある町にしたい。」

観光について

「ムラサキセンブリもありますよってお教えしたら、珍しいって写真を撮っていかれたり、まさか鈴虫花を見られるとは思わなかったって感激される人もいました。公園を整備して何になるって言う人もいるけど、これこそ他にはない佐川の財産やと思う。」

「少しでも佐川の宣伝になればと思って。佐川はわざわざ来ようと思わないと来る場所じゃない。でも古い町並みはきれいだし、いろんな人にもっと知ってほしいなと思います。着物を着て歩くにはすごく素敵な町。」

「道の駅のような大型バスを停められる場所や、トイレがある公共施設などがあったらいいなと思います。地域に来んと手に入らんものがたくさんあると、遊びに来る人も楽しいと思うんですよね。」

「きちっと目標がないといかんでしょう。華やかさよりも、町のもつ良さをきちんと生かしていくことが大事。私はずっと外で仕事をしてきましたから、佐川のいいところも悪いところもぱっと見えたりするんです。」

「町は観光やお土産品に力を入れようと言っていますが、まだまだバックアップが薄い。最近、加工品やお

土産って、パッケージにコストがかけられているものが多いですよね。佐川にも町専属のデザイナーがいたらいいな。」

「高知市内の方からも買いに来てくれる方もいます。佐川まで来たからお昼も食べたいとお勧めの店を聞かれることも多いから、ぱっと渡せるようなパンフレットがあると。」

「地元の親戚の集まりとかあると、12-3人でお茶が飲める場所がないんですよ。その点、浜口邸では飲める。14時〜15時の間に開いている喫茶店が佐川にはないから、そこをカバーしているのも利用者が増えてきている理由なんじゃないかな。」

「観光も、足場となるようなビジョンや目標が決まっておらず、どの方向へ走っていったらいいのかが分からないのが難点ですね。個人個人に想いがあっても、みんながばらばらと活動していて。単発であとに続かないイベントも、これが原因ではないかな。」

「なにもないとみんなは言うけど、お土産もお昼を食べる場所もある。ポテンシャルはあるけど、うまくみせられてないだけ。なにもないと思わないでほしい。なんでもあるし、誇りになるものもある。しらけずに一緒にがんばってもらいたい。」

「桜100選にもなった時代を知っているから、町民全員がさみしい想いをしています。60年、桜に肥料も間伐もやってない。管理不足で桜が消えるという歴史をもう3回も繰り返している。自分たちがもっとはやくきづいていたら。」

「私のまわりでは、佐川町は越知町や須崎市に行くためのルートに過ぎないという印象が強いようです。ドライブに行くなら佐川といわれるような存在感と名所、名産を今後10年で生み出してもらいたいです。」

「植物といえば、佐川!!という町にしたい。」

移住・定住について

「若い人にとって、尾川がより住みやすい町になってほしいですね。そのために大事なのは、住環境と仕事。学校も生徒数がもっと増えてくれることが理想かな。」

「引っ越してきて、知っている人がひとりも居ないこの場所で、何か自分を知ってもらえるきっかけになったらと考えたのが、お店を始めた理由のひとつ。ここでお店やってます。よろしくお願いしますって、言いたかったのかもしれません。」

「佐川へ来てからも長い間、地元にとけ込むのが難しかったんです。でも佐川の方って一度知り合うと一気に関係が深くなる。イベントに参加させてもらったおかげで、町の人たちともお近づきになれました。」

「３年間の任期終了後の自分の進路も気になっています。できることなら佐川に関わり続けたい。けれどこれから結婚して家族をもつことを考えると、課題は多い。」

「黒岩だから、尾川だからなど、それぞれの地区での対抗意識が強いですよね。集落を超えた協力関係ができれば。」

「のんびりと暮らせる街であって欲しい。今あるものを大切にし、開発などはできるだけ押さえ。こちらで生まれ育った方には普通のことでも、市内や県外の人には、驚くほどうらやましがられることが多いです

よ。農作物を作り、木を切り、山や川で遊ぶ人がいる。そんな町でずっとあってほしいです。」

「魚がたくさん住んで、人が泳げる川のある町にしたい。」

安全と安心について

「最近気になるのは、駐在所が各地区からなくなってしまったこと。どんな田舎でも犯罪は起こるし、田舎にこそ必要やと思うんやけど。高齢者を狙った犯罪が増えているし、安心して暮らせる町づくりが何より大切と感じています。」

「週に一度、配食サービスで地域をまわることは、お年寄りの安否確認にもなっていますね。いつも買ってくれるお客さんが出て来ない時はこちらから玄関まで行って声をかけたり、お客さんの間でも「あの人まだ来ちょらんねぇ。そろそろ起きちゅうはずで」と気にとめるきっかけにもなっている。」

「歩行器渋滞がおきるような、みんなが元気でいきいきと過ごせる町でありたい。」

「町の計画書などによくある「地域」「地域住民」といった顔の見えない誰かではなく、具体的な顔の見える地域の「人」を巻き込んで福祉のしくみを充実させていきたい。」

「あったかふれあいセンターは自由に出入りできるのがいいんじゃないかな。珈琲も提供しているので、男性でも手持ち無沙汰にならんし。うちらを孫のように思うてくれて、野菜を持ってきてくれたりもするんです。」

「気になる家を訪れ、必要に応じて行政機関につなぐ。何かあったらぐっと入って手を貸して、すっと引くのがよいんよ。」

「今後は保育園や、集落活動センターとの連携も進めていきたい。昔は集落のなかで当たり前に機能していた集いや見守りを、自然な形で取り戻せたら。」

「斗賀野以外の地区からも要請があれば出向いてきましたが、件数が増えれば、このセンターではどうしても斗賀野在住の人を対象にせざるを得ない。佐川のすべての地区にあったかふれあいセンターができたらいいなと思います。」

「女性は同じ地域に暮らす人たちによく目を配っています。あそこの誰は最近気になるとか、お嫁さんはここにおるけど心配とか。そうした話を手がかりに訪問してみると、その指摘が的確なことが多いんです。」

「10年後はつながりが実感できる町にしたいですね。幸せは生活の質、人間関係のおおさだと思う。つながれるきっかけをつくれるまちでありたい。ずっと家にいたひとがいきいきしだすような、出番があたえられたときの輝きや居場所のある町。」

「認知症患者が急増しています。老々介護で高齢者が苦労しないような、認知症になって徘徊しても大丈夫な町であって欲しい。」

「高齢者や障害者がしあわせに生活できる町は、誰にとってもしあわせな町だと思います。高齢者福祉や障害児福祉などの施策に力を入れて欲しい。」

「災害の危険がない、災害に強い町であってほしい。」

教育について

「尾川ではPTAに参加するのは当たり前。でも他のPTAに出てみたら、あまりの保護者の少なさにびっくり。生徒数が多い分、人任せになっているのかな。どうにかしたいけど、一人では無理。誰か一緒に声をあげてくれる仲間が居たら。」

「もっと子どもらが率先して、町の祭りとかイベントとか、いろんなことに参加したいと思えるような町になったらいいな。そのためには大人が変わらんと。ゲームばかりの子どもたちに、人と関わっていくことの楽しさを伝えたい。」

「黒岩の敬老会で、大勢のお年寄りの前で子どもたちが唄や太鼓を披露したんですよ。そしたら、元気をもろうたよって涙を流して喜んでくださる方もいらして。これは子どもたちにとって、大きな成長の機会。自分のおじいちゃんおばあちゃんならともかく、全然知らん人に褒められた。子どもにとっては不思議なことであると同時に、"僕らが頑張らんといかん"って気持も芽生える。」

「田舎の子どもたちがみんな自然遊びが得意かというと、今はそうとは限らない。お母さんの中には、生き物を汚いからさわんなさんな、と言う人もおるし。でもなるべくこの園では、子どもたちと山や谷へ出て遊ぶようにしています。」

「イモリに直接ふれると、子どもたちは、動きが面白いとか、臭いとかいろいろ言うんですよ。そういう実感がすごく大事。図鑑じゃ絶対にわからんこと。わぁすごい、不思議って子どもの心に響くような体験をたくさんさせてあげたいと思いますね。」

「信頼して任せれば、子どもはきちんとやる。でも今、大人も子どもも小さな失敗も許されない社会。決まったことから外れることが、難しくなっているように思います。」

「子どもにはそれぞれ個性があって、無限の可能性をもっている。"やっちゃいけないこと"を設定し過ぎるのは、可能性の芽をつむ。子どもの自信を膨らませてあげるのが、学校や教師の役割だと思うんですよね。」

「町全体にきちんとしたスポーツ振興計画がないのが課題でしょうね。今後は健康福祉課や社会福祉協議会と連携して町全体で考えていくことが大切だと思います。」

「理想の"こども"なんていないんですよ。どんな子どもも受け入れられる、懐の深い教育であってほしい。佐川の自然、農産物、魅力的な人から学ぶカリキュラムがある、豊かに学べる学校。」

「学校教育が充実している町を望みます。小中学校で、佐川町の歴史や産業、佐川にどんな仕事があるかなどの授業をすれば、子どもたちが町の良さを再認識するのではないでしょうか。学校での勉強以外にも、大切なことがあるのではないかな。」

子育てについて

「今、子育てで大変なため、子育てしやすい環境を望みます。やはり子育て中はお金もかかるので、子育てしやすい環境というならば、率先して佐川町も取り組んでほしい。」

「お母さんも子どもとずっと２人で家におったら息が詰まるし、ちょっと息抜きができるだけで全然違う。でも今は子どもを預けることが、基本はしちゃいけんこと。友だちとご飯を食べたり、美容院へ行ったりす

ることすら許されんのかなって思う。」

「3歳くらいまでの子どもをみてあげられたらなって個人託児所の開設を思いついたんですが…。法人組織でないと使える保険の制度がなくて、話が止まっています。」

「保育園で働いていたんですが、持ち帰りの仕事も多くて、体力的にも時間的にもしんどかった。子育てしながら続けるのは無理だなと思いました。」

「佐川は町の中心部に病院などが集まっていますが、産婦人科がないのが残念。子育て世代を増やしたかったら、案外大事なことではないかな。」

「やっぱり子どもがもっと増えないかん。今いくらかもらえる補助もあるけど、4人目産んだら500万円もらえるくらいの制度があってもいい。子どもは地域の財産やけぇ。」

「子どもたちが元気いっぱいあそべる町であって欲しい。」

結婚について

「高知No.1のデートスポットの町にしたい。」

「結婚していない人が、たくさんいます。誰かお世話人を育てて、お世話係を作ったら、もっと結婚する人口が増えると思います。」

生活インフラについて

「私たちが学生の頃はみんな自転車で駅まで行きよったけど、今はほとんどが車での送り迎え。でもなくなったら困る人もおるからね。尾川ではバスがなくならんように、おばあちゃんたちが懸命にバスに乗る運動をしてくれとるらしいんよ。」

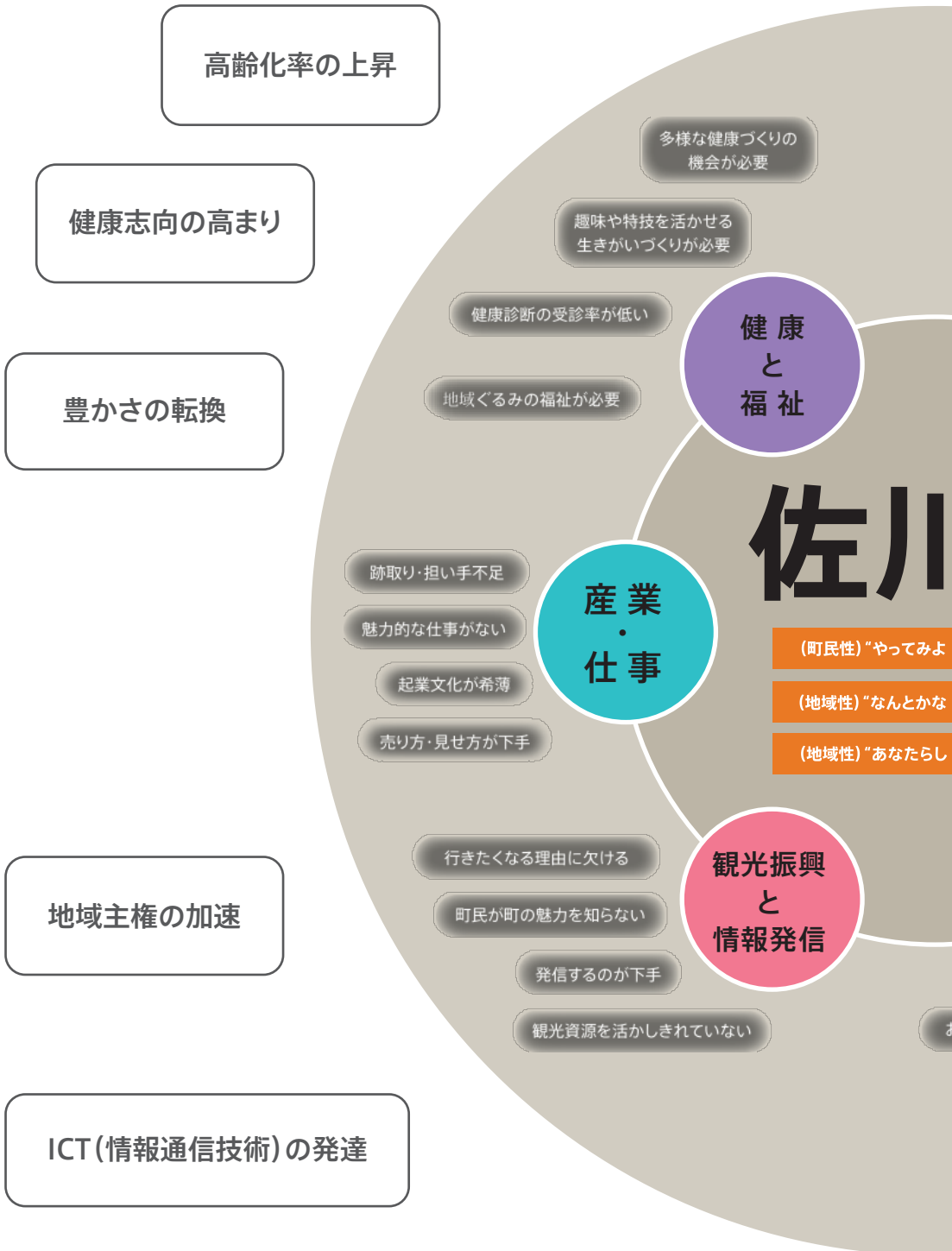
「以前は地元で直していた規模の修繕も、役場に依頼にいくようになりましたね。昔はまだ地元に自分らの集落のことは自分らで直せんといかんっていう意識があって、もっと自発的にやってくれよったんですけど、今若い人らは地元に関わることも減ったし、直せんし、役場に頼もうかってことになるんだと思います。」

「10年後、私は70歳を超えますが、孤立感をもたずに暮らせる町であってほしいと思います。現在自家用車で移動していますが、いずれそれもできなくなるので、いまよりは公共交通があるといい。自家用車の乗り合いみたいなことでもいいし、それができるような共同体であって欲しい。」

「図書館を充実させてほしい。施設などを立て替える時は木のぬくもりのある建物にしてほしい。」

5.　総括

これまでみてきた佐川町を取り巻く社会変化と課題をまとめ、下図に示します。





人口減少

環境配慮型社会への転換

安全・安心への
意識の高まり

地域のつながりの希薄化と
コミュニティ構造の変化

若年女性の人口流出

第２章　佐川町の未来像

1．未来像を設定する上で大切にした考え方

前章でも述べてきましたが、佐川町を取り巻く社会環境は厳しさを増し、また佐川町自身もさまざまな課題を抱えています。これらの変化に柔軟に対応し、私たちが抱える課題を、一人ひとりが主体性を持って解決できる、しなやかで強い町づくりが必要となってきています。“町”とは“人”の集合体です。そして、“町づくり”とはすなわち“人づくり”です。これまで大切にしてきた、佐川町の魅力である自然・歴史・文化を守り高めながら、ここに暮らす人を中心に据えた町づくりを目指していきます。

(1) “ハード”から“ソフト”へ

これまでの取り組みにより、住民の町づくりへの参加を押し進めるような場づくり・制度づくりが行われ、少しずつ行政や町民の間に協働と地域参画への意識が浸透し、地域の課題を自分たちの力で解決に導いて行く体制ができつつあります。しかし、これまで力を入れて来たこれらの協働の町づくりのためのハード（施設・制度・場）は、これを使いこなすことができるソフト（人・コミュニティ）が不在では充分に機能するとは言えません。ハードの整備ももちろん大切ですが、協働の町づくりを推進することができる自立的な地域コミュニティと、コミュニティをつくりあげ導くことができる人づくりに力を入れる段階にきています。

(2) “他人ごと”から“自分ごと”へ

これからの10年はこれまで以上に、地域の担い手が減り、高齢化が進み、行財政が苦しくなるなど、厳しい地域運営になると予測されています。人口が減るということは、これまで一人ひとりが担ってきた地域のなかでの役割を担う機会と量が増えていくということでもあります。一人ができる量には限界があります。町づくりを他人ごととは思わず、自分のこととして考える、協働の町づくりの担い手の裾野を少しずつ広げ、一人ひとりがまちを自分たちの手でつくっているという意識を持つことができる、自分ごとの町づくりを進めていく必要があります。

⑶ “個の私”から“地域の中の私”へ

一方で、従来型の地域コミュニティや一次産業の衰退、町外勤務者の増加などにより、佐川町に住んでいる、この町で暮らしているという帰属意識、町民意識も薄らぐ傾向にあります。私たちが暮らすこの町の景色、歴史、文化、人は、これまでこの町で暮らして来た人々が愛し、守り、育て、残して来た財産です。足下の良さに気付き、この町で暮らすことを誇りに思い、この町の暮らしを愛する人を増やしていくことも、一人ひとりが自分はまちの一員であると気付き、まちと自分の関係を一歩前に進めてもらうために、大切にしていかなければなりません。

⑷ “脇役”から“主役”へ

佐川町民は5つの幸福度因子の中でも、特に「やってみよう」の因子が低いという傾向にありました。この因子は、「得意としていることがある」「目的・目標を持ってやっていることがある」と町民自身が感じているかを聞いている項目です。ヒアリングからも見えてきましたが、佐川町民は目立ちたがり屋や出たがりが少なく、どこかおっとりとした脇役タイプの町民が多いようです。それぞれの場面で一人ひとりの個性や特技を活かせる機会をつくり、目標を持ち、やってみようと挑戦できる“主役”を増やしていくことが、佐川町民の幸福度の最大化にもつながります。すべての人に出番があり、すべての人が感謝される。みんなが主役になれるチームづくりを推進します。

以上のように、地域の担い手となる“人”の育成と町民意識の醸成、地域の一体感をつくり出していくことが、これからの10年の佐川町の町づくりの核となる基本的な考え方です。これらを踏まえ、第5次総合計画で目指す町の未来像を定め、その未来像を基軸にした町づくりを進めます。

2. 佐川町の目指す未来像

チームさかわ
まじめに、
おもしろく。

さかわを愛し、さかわの未来を思い描く、
わたしたち町民一人ひとりの想いや行動を結集し、
“わたしたちのまち・さかわ”をつくること。
「チームさかわ」は、そんな想いから生まれました。
“せっかくやるなら、本気で。
せっかくやるなら、思いっきり楽しんで。“
これが、「チームさかわ」の基本姿勢です。
文教のまち・さかわで長年培われてきた、
どんな課題にもまっすぐ向き合う誠実な姿勢、
どんなに困難でも笑顔を忘れず楽しく挑戦する姿勢。
どんな困難に直面しても、この姿勢で立ち向かえば、
きっと新たな道をひらき、乗り越えることができます。
わたしが笑うと、みんなが笑い、まちも笑いだします。
さあ、みんなでつくろう！ まじめに、おもしろい、佐川町。

10年後、わたしは、どこにいて、どんなふうに暮らしているでしょうか？
美しく大らかな山々に抱かれ、豊かな水源を有し、
ささやかながら可愛らしくたくましい山野草と生きる佐川町で、
愛する人に囲まれ、笑顔で楽しく毎日を過ごしているでしょうか？
“チームさかわ”は、さかわを愛し、未来を思い描き、
またそれを実現していくために生まれたチームです。
メンバーは、佐川町に暮らすわたしたち一人ひとり。
「まじめに、おもしろく。」このまちを育てていきましょう。
一人ひとりの想いや行動が集まって、
“わたしたちのまち・さかわ”は、つくられています。
「町民がひとつのチームとなって、まちをつくること」、
それは町民一人ひとりがそれぞれの役割をもつことができ、
自らの可能性を生かせる社会をつくることにつながります。
「せっかくやるなら、本気で。 せっかくやるなら、思いっきり楽しんで。」、
これが、「チームさかわ」を支える10年間の基本理念です。
自らの好奇心とまっすぐに向き合い、とことん探求すること。
また、そこから新たな学びを見いだし、知を育んでいくこと。
長きにわたって「文教のまち」として知られる佐川町では、
“学びを通して、人の心を育むこと”を大切にしてきました。
ここで生まれ育った日本を代表する植物学者・牧野富太郎をはじめ、
学問や教育はもちろん、暮らしのなかから気づきを見いだす姿勢は、
いまも変わらず、脈々と町民のわたしたちへと受け継がれています。
その一方、しあわせなまちは、
眉間にしわを寄せて考えているだけではうまくいきません。
無理なく続けていくためには、楽しくないとやっていけない。
わたしが笑うと、みんなが笑い、まちも笑ってくれます。
そんな一人ひとりの想いや行動が、まわりの人の心を動かし、
さらには、まちの未来を形づくっていきます。
さあ、はじめましょう！ まじめに、おもしろい、佐川町。

3. 未来を実現するための分野別方針

佐川町の未来像を実現するために7つの視点（分野）を設定し、それぞれの視点において、どのように取り組みを進めていくのか、基本的な考えや方針を示します。

（1） 教育

人づくりは、佐川の伝統です。人づくりは、佐川町の「得意としていること」です。“まじめ”な佐川の人びとが培ってきた「文教のまち」を誇りに思いましょう。未来を担う子どもたちに佐川の良さを教えてあげましょう。地域の人にも教えてあげましょう。

教わる前から知っている、気づいていることもいっぱいあるはずです。地域の良さを知っているはずです。素晴らしい人、がんばっている人を知っているはずです。

地域の人びとが地域を愛し、お互いに学び合う。子どもたちが大きくなってもふるさとを愛し、学んだことを大事にしている。そんな佐川町を目指して、そんな人づくりを進めて行けば、「文教のまち佐川」と、佐川らしく少しひかえめにでも、胸を張れるまちになります。

これまで培ってきた佐川の伝統・文化を大事にしながら、学ぶことの楽しさを感じられる取り組みを進め、地域ぐるみでの人づくりを進めて行きます。

（2） 産業と仕事

仕事づくりは、いつの時代もまちにとって重要かつチャレンジングな課題です。「やってみよう」と思う人がたくさん育ち、それを後押しする地域の風土が必要です。

仕事づくりは、地域づくりにつながります。とりわけ1次産業で働く人の多い佐川町では、仕事づくりが担い手づくりでもあります。

一方で、社会環境や人々の価値観が多様化する中で、働き方も多様になってきています。大企業による大量生産・販売ではない、生産者と消費者が一体化した小さな経済やコミュニティ経済を意識した取り組みも生まれています。

それぞれのライフスタイルにあった仕事を選びあるいはつくり、働くことができるまち。そんなまちをそれぞれが「得意としている」ことを最大限に活かしてつくりあげましょう。

これまで培われてきた営みを大事にしながら、新しい考え方も取り入れ、女性や若い世代の活躍する場を設けることで佐川らしい豊かなまちをつくり出していきます。

(3)　結婚・出産・育児

子どもたちの元気な声が地域に響く。佐川町はそんなまちでありたい。地域の想いがアンケートやワークショップで多く聴かれました。

お母さんや、お父さんがイキイキと安心して子育てができる。佐川町はそんなまちでありたい。子育て世代から、おじいちゃん・おばあちゃんの世代から多くの意見をいただきました。

子どもを地域の宝と考え、子育てを応援したいという想いが佐川の地域やまちにはあります。佐川で結婚し、子育てをしたいと願う人がいます。現に子育て真っ最中の人もいます。個人と個人がつながり、地域と個人がつながれば、地域全体で子育てする環境が生まれます。

出会い・結婚・子育てを希望する人が一歩踏み出し、応援したい人も一歩踏み出せるように環境を整備し、地域・家族、みんながしあわせに暮らせる佐川町をつくり出していきます。

(4)　観光振興と情報発信

観光とは、その地域の光を観てもらうことによってもてなしをするという語義のとおり、地域の光すなわち宝を活かした取り組みです。佐川町には豊かな地域資源があります。培われた歴史・文化・伝統があります。

観光とは、まちを愛し、誇りを持ち、胸を張って佐川町へようこそと言える町づくりを進める取り組みです。佐川町に多くの人が訪れ、ファンになってもらい、また訪れてくれることは、地域の人にとってどれほどしあわせなことでしょう。

ふらりと訪れた人が地域の人に何気ないおもてなしを受け、まちを知り、感じ、味わい、楽しむことのできる佐川町をつくりあげることで、まちの人もしあわせになる。そんな想い

で、観光に取り組んでいければ、佐川らしい観光が生まれます。

「目立ちたがり屋」にもあえて挑戦してみましょう。個人では、“脇役”でも町全体として、「チーム」として“主役”になることもできます。佐川の光を町内外の人びとに向けて佐川らしく発信できれば、もともとある宝をさらに活かすことが出来ます。

町内外の人を惹きつけられる魅力をまちの人みんなでつくり、磨き上げ、発信することで、観光客を呼び込み、移住へも繋がる取り組みを進めます。

(5)　健康と福祉

いつまでも健康な体でいたい、というのはだれしもの願いです。健康づくりは、まさに一人ひとりが“主役”の取り組みです。お互いの違いを認め合う、包容力のある町は幸せな町です。そして一人ひとりの取り組みが地域や町全体の取り組みへと繋がります。

健康づくりは、楽しくできる取り組みです。毎日の散歩やスポーツ、趣味の文化活動、いろいろな仲間と楽しみや笑いを共有しあうのも大切な健康づくりといえます。

子どもも、働き盛りの人も、お母さんも、お父さんも、障害のある人もお年寄りも、健康で生きがいを持ちながら支え合い、暮らし続けられるまち。そんなまちを目指して、一人ひとりが“自分ごと”として町づくりに取り組みましょう。

みんなが自分らしく、安心して、健康に暮らし続けられることは、しあわせな町づくりの基本です。福祉、介護、医療が充実し、みんなが支え合う町は幸せな町です。「長生き」から「健康に長生き」に。「他人ごと」から「自分ごと」に。安心して暮らせる「居場所づくり」と、誰かのためにイキイキと活躍できる「出番づくり」がひろがる町づくりを進めます。

(6)　安全・安心

安全に安心して暮らせることは、しあわせな生活の基本です。安全・安心な町づくりは、多様な取り組みが重なり合い築き上げられます。個人の安全がつながり、地域の安全・安心をつくります。また、地域の安全が個人の安心にもつながります。すべてを一人

ではできません。それぞれがそれぞれの役割を担いながらまちの安全をつくり出していくのです。

安全・安心な暮らしのためには、環境整備が必要です。安全な道、災害に備える整備、防犯体制の確立などと併せて地域のつながりも大事な環境整備です。そんな安全・安心な町づくりを意識して地域を見てみると地域の安全が“自分ごと”になります。

ハードの充実はもちろんのこと、それを活かすソフトの充実も同時に進めていきながら誰もが安全で安心して暮らせる町づくりに取り組んで行きます。

(7) 行財政

町民の幸福度の最大化を実現するために、持続的・発展的な自治体運営を行っていかなければなりません。持続させるためには、計画的な財政運営が必要です。少子高齢化等に伴う地域経済の停滞により、自主財源の確保が厳しくなるなか、これまで以上に“まじめに”財政運営を行っていきます。

発展的な運営には、ひとづくりが大切です。行政職員の能力向上はもとより、地域や役場で活躍できる人材を育成し、町民も役場も“自分ごと”として前向きに取り組む。そんな「みんなでつくる」町づくりに取り組みます。

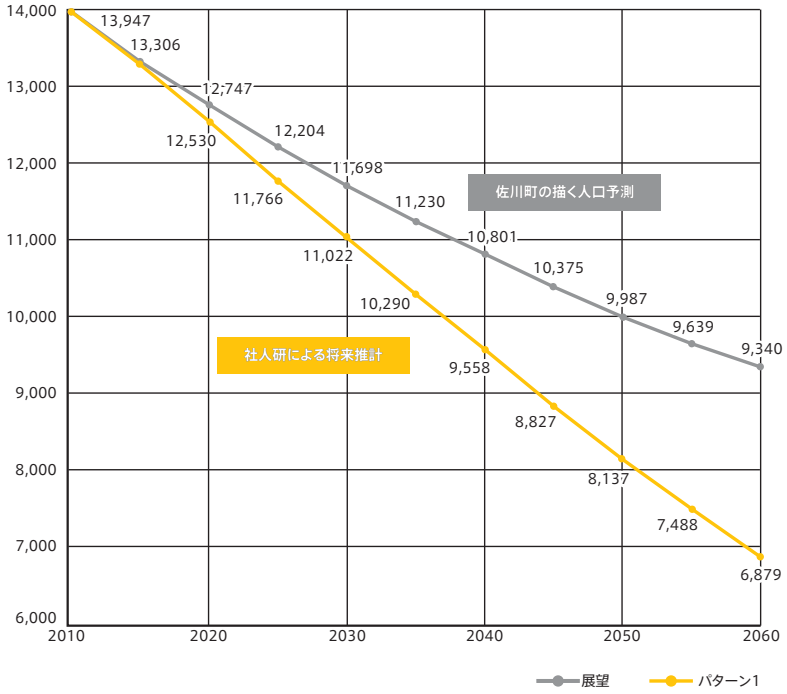
4. 人口予測

わが町の人口は、1985年(昭和60年)をピークに減少が始まりました。減少の主な要因は、死亡数が出生数を上回る自然減と女性の転出超過などの社会減とみられています。自然減の傾向は、老年人口の増加、若年人口の減少傾向からも今後とも続くと考えられます。また、社会増減については、一定の傾向を読み取ることは難しく、年ごとに変動があります。年齢階級別の人口移動では、大学等への進学、就職等に伴う転出超過傾向は続く一方、Uターン就職等に伴う転入超過は減少傾向にあり、特に女性の転出超過は人口減少に拍車をかけています。

社人研の推計を見ると、将来人口推計は2060年（平成72年）には現在の約半数となると予測されています。ただし、この推計も人口移動が今後一定程度収束すると仮定したものであり、年齢階級別に見る15歳～24歳の転出超過がこのまま続くとすれば、さらなる人口減少に陥ることも考えられます。人口が減少すること自体は、決して悪いことではありません。現に江戸時代の日本の人口は、現在の3分の1程度の4000万人程度で、このときの人口規模が日本の適正人口だったとの説もあるほどです。このように、ある程度の人口減少は場所や時間のゆとりをもたらし、豊かな生活を送る上で、いい変化だととることもできます。問題なのは、この人口が減少する幅がこれまで日本も世界も経験したことがないスピードで進行することにあります。大幅な人口規模の減少は、いたるところでひずみを生み、さまざまな問題を引き起こします。減少のスピードを緩やかにし、ゆっくりと変化していくために、それぞれの地域が、それぞれの地域の活力を維持していくための適正な人口規模を維持していくことが求められています。

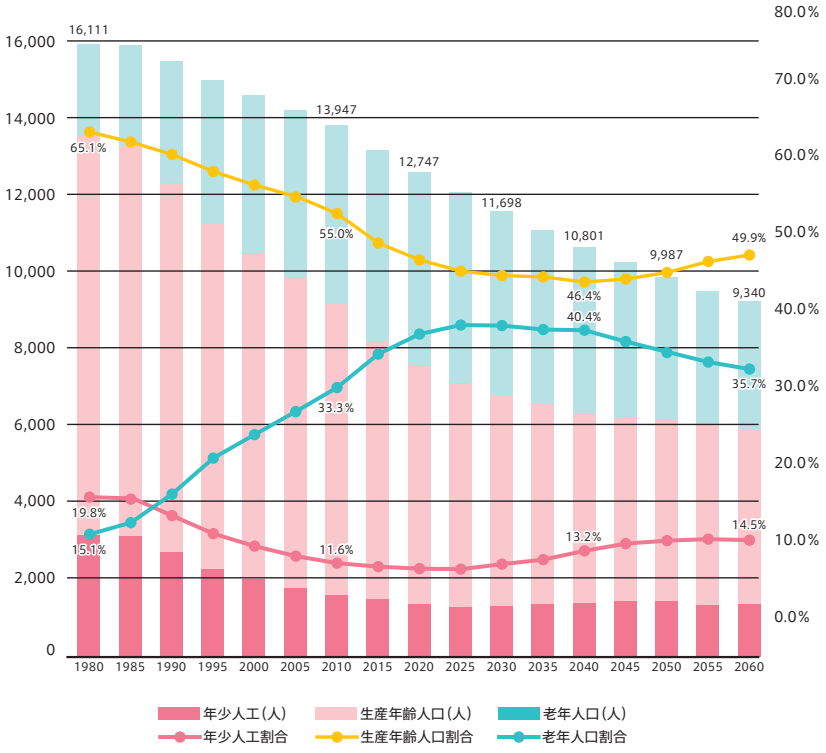
佐川町の人口予測を描くうえで、合計特殊出生率や社会増減がある程度改善したと仮定したときの推計を行った結果、町の人口は、2040年（平成52年）で10,801人、2060年（平成72年）で9,340人となり、社人研の推計（6,879人）と比較すると、2060年で約2,500人の施策効果が見込まれます。

社人研による人口推計と佐川町の描く人口予測



出典:平成27年8月佐川町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン

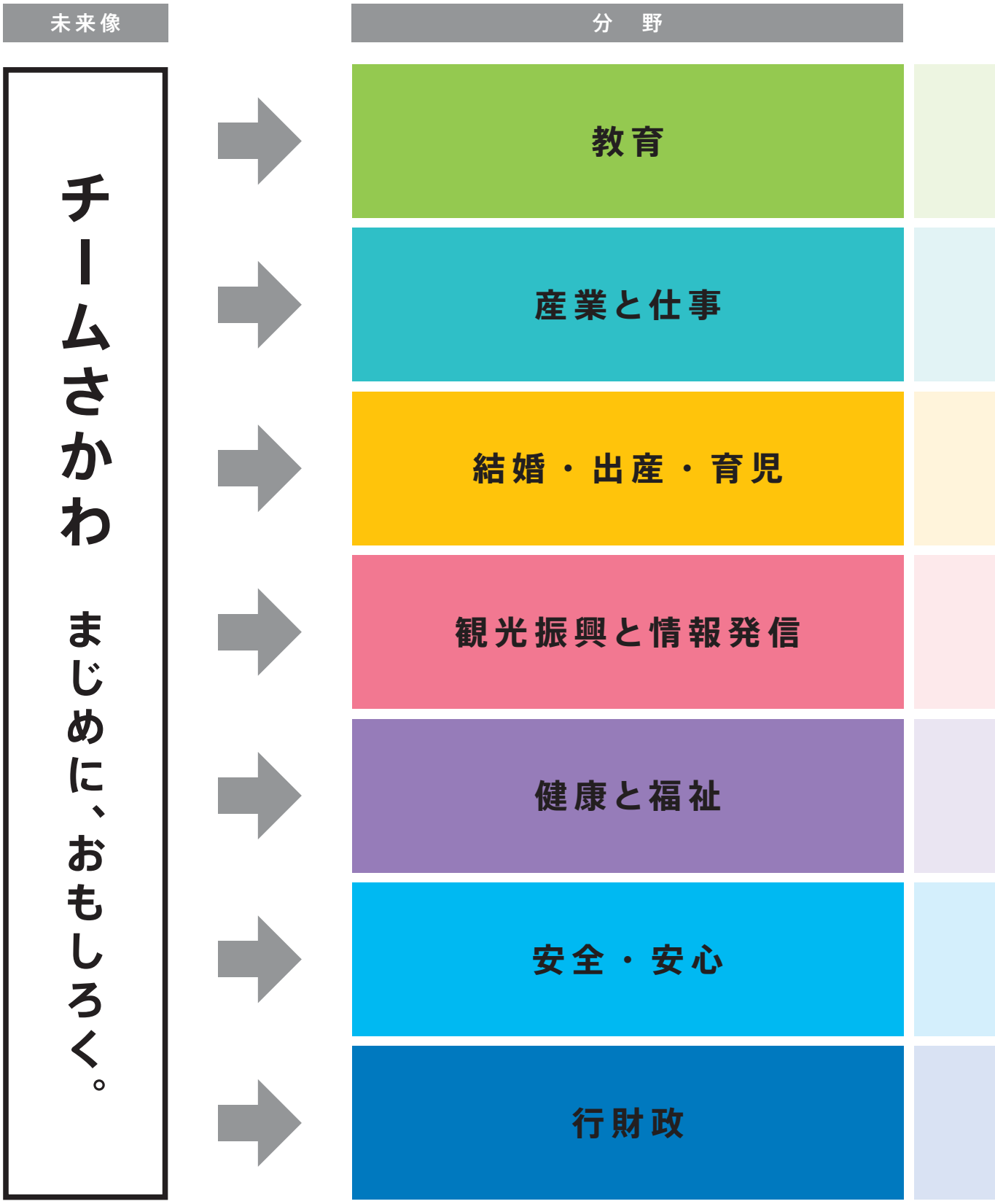
総人口・年齢３区分別人口の人口予測



出典:平成27年8月佐川町まち・ひと・しごと創生人口ビジョン

第3章　未来を実現するために

分野別施策の体系図


未来像
チームさかわ
まじめに、おもしろく。
分　野
教育
産業と仕事
結婚・出産・育児
観光振興と情報発信
健康と福祉
安全・安心
行財政

方　針	施　策
文教の町さかわを確実に継承し、佐川の未来を担う創造性にあふれ地域を愛する人材を地域ぐるみで育てます。	施策1　佐川オリジナル教育による学力の向上 施策2　地域資源に学ぶふるさと教育の推進 施策3　地域ぐるみ教育の体制づくり 施策4　スポーツ・文化活動を楽しむ社会教育の推進 施策5　自然環境を大切にする意識の醸成 施策6　魅力ある佐川高校づくりの支援
自伐型林業、農業、ものづくり、商工業。１人ひとりが個性を活かしイキイキと楽しく働ける雇用環境、ビジネス環境を整備します。	施策7　農業振興と6次産業化の推進 施策8　自伐型林業を核とした林業の推進による雇用づくり 施策9　さかわ産木材を活用したものづくりの推進 施策10　農業・商工業の後継者対策の推進 施策11　スモールビジネス起業支援による商工振興 施策12　さかわ産商品の開発・流通・販売体制の整備 施策13　企業誘致による雇用づくり
結婚したい、産みたい、町民１人ひとりの希望を叶え、子どもを地域ぐるみで育てる環境を整えます。	施策14　出会い・恋愛・結婚の希望を叶える環境づくり 施策15　安心して子どもを産める環境づくり 施策16　地域ぐるみで子育てできる環境づくり 施策17　子どもが安心して遊べる環境づくり 施策18　子育て世代を支えるつながりの強化 施策19　働きながら育てられる環境づくり
さかわの豊かな地域資源を活用した観光コンテンツを開発し、体系的な情報発信により、地域外から観光客や移住希望者を惹きつけられる強いさかわブランドを築きます。	施策20　“植物の町”を打ち出す観光コンテンツの開発 施策21　“文教の町”を伝える観光コンテンツの開発 施策22　佐川ブランドの確立と情報発信の強化 施策23　観光エキスパート人材の育成 施策24　観光協会・行政・町民が一体となった観光客受け入れの整備 施策25　情報発信と雇用・住環境整備を中心とした移住・定住促進
みんなが健康で生きがいを持ち、支え合いながら誰かのためにイキイキと活躍できる県内一の健康長寿の町を実現します。	施策26　予防医療サービスの充実 施策27　健康診断受診の習慣化の促進 施策28　地域ぐるみでの健康づくりの推進 施策29　セカンドライフ充実のための生きがいづくり支援 施策30　地域の力を引き出す地域包括ケアの体制整備 施策31　障害児者福祉の推進
お隣同士、自治会内、地域内の関係性を密にし、安心して暮らせる生活環境を町民みんなで守り、作りあげます。	施策32　南海トラフ地震に備えた町づくり 施策33　自主防災組織の活性化と防災となり組の促進 施策34　住民生活を支えるインフラ整備 施策35　安全・安心対策の強化 施策36　ITを活用したあんしん生活情報の共有 施策37　地域の実情に即した公共交通の確立と維持 施策38　支えあい・助けあいネットワークの推進
将来を見据えた財政運営を推進し、町民・役場が一体で町づくりを推進できる情報共有、組織づくり、人材育成を進めます。	施策39　行政職員の能力強化 施策40　コンプライアンスの徹底 施策41　開かれた組織づくり 施策42　将来を見据えた財政運営 施策43　役場と地域をつなぐ広報・広聴の強化 施策44　町づくりを担うファシリテーター人材づくり 施策45　未来へつながる人権尊重の推進

（1） 教育

文教の町さかわを確実に継承し、佐川の未来を担う創造性にあふれ地域を愛する人材を地域ぐるみで育てます。

現状と課題

わが町は、古くから学問や教育を重視し、牧野富太郎や田中光顕など、多くの偉大な先人を輩出し、文教の町として教育や文化活動を積極的に推進してきました。文教の町の“文教”とは、学問や教育を通じた、教え・教えられる環境の充実により、よりよい方向に人を導くことを指し、名教館では、学問と道徳を共に教え、自分の利益を優先させるのではなく人のために行動できる人を育てること、そして、多くの優秀な人材を外部から招致し、最先端の学問を積極的に取り入れていました。しかし、学校教育の標準化、従来型の地域コミュニティの衰退などにより、若い世代を中心に、本来の意味での「文教の町」の考え方を知り、体験する機会が減少しています。今後、文教の町として発展していくために、地域の人からの学びや体験を通じて、これまで培われてきた佐川の教育風土を確実に継承し、学問を尊び、人や地域を愛し、思いやり、さまざまなことに挑戦できる、創造性にあふれる人材を地域ぐるみで育成していく必要があります。

施策 1　佐川オリジナル教育による学力の向上

かつて名教館で行われていた特色のあるレベルの高い教育を継承し、時代の変化に対応できる未来の担い手を育んでいくため、佐川ならではの独自性のある学校教育をすすめ、確かな学力の育成を目指します。

・モノづくりなど創造性を育てる教育の推進
・子どもの教育環境の整備
・保・小・中・高の連携による一貫した教育の提供
・子ども達のチャレンジを後押しする支援制度の充実
・教職員力と学校力の向上
・国際化に対応する英語教育の充実

施策 2　地域資源に学ぶふるさと教育の推進

佐川町を担う人づくりの視点として、地域の歴史･文化･産業への理解を深め、郷土愛を育てるため、町内の人的･文化的資源を活用したふるさと教育を推進します。

・地域資源を活用した独自のふるさと教育の充実
・地域の歴史・文化・生活・産業を学ぶ機会の充実
・教職員の地域活動の推進

施策 3　地域ぐるみ教育の体制づくり

子どもたちが地域との関わりの中で育つように、町民と交わり、町民から学べる地域ぐるみ教育の推進体制を整えます。また、地域の側から子どもたちに関わっていく機運を高めます。

・地域住民を先生に据えた授業の充実
・コミュニティ・スクールなど地域ぐるみでの学校づくりの推進
・子どもたちの地域活動への参加の促進
・青少年の育成

施策 4　スポーツ・文化活動を楽しむ社会教育の推進

幅広い年齢層が参加できるスポーツ・文化活動等の生涯学習の機会を増やします。また、既存の活動団体との連携を深め、スポーツ・文化活動の機運を高めます。

・教え、教えられる場づくりの推進
・多世代が参加できる生きがいづくりの場の推進
・図書館など社会教育施設の充実
・活動発表の機会の充実
・活動情報の収集と発信

施策 5　自然環境を大切にする意識の醸成

町民全体の、町内における自然環境への関心を高めて、環境保全をより一層進めます。また、恵まれた自然環境を大切に次代に伝えるため、町内に自生する牧野富太郎博士ゆかりの植物についての学習に取り組むなど、町内の自然環境への関心と意識を高める取り組みを進めます。

・野外体験活動の充実
・学校での環境学習の推進
・環境・景観保全活動の推進
・循環型社会づくりの推進

施策 6　魅力ある佐川高校づくりの支援

町内外から多くの生徒があつまり、教育が充実するよう、魅力ある佐川高校の実現を目指し、行政、地域、高校の連携を強化するとともに、地域資源を活かし、地域住民の力を借りて特色のある授業や活動を実施するなど、地域と行政が積極的に応援する体制づくりをすすめます。

・佐川高校を町民全体で盛り上げる気風の醸成
・行政、高校、地域住民の連携強化
・学校の取り組みに対する支援の充実
・学力向上への支援体制の充実

（2）産業と仕事

自伐型林業、農業、ものづくり、商工業。１人ひとりが個性を活かしイキイキと楽しく働ける雇用環境、ビジネス環境を整備します。

現状と課題

働きたい人に見合う量の十分な仕事があり、生活に必要な所得が得られ、必要なもの、欲しいものを消費できる。そんな経済的に安定が見込まれる地域に人は集まります。しかし、農林業や商工業は、後継者不足や担い手の減少に歯止めがかからず、衰退しつつあります。豊かな森林資源を活かした自伐型林業、木材などの地域資源を活かしたものづくり、農作物の6次産品化など、新しい仕事を増やし、職業選択の幅を今まで以上に、広げていく必要もあります。既にある仕事の魅力を高め、佐川の資源を活用した新しい仕事づくりを支援し、若者を始めとした町民１人ひとりが個性を活かし活躍できる、多様な雇用環境、ビジネス環境の整備が求められています。

施策 7　農業振興と6次産業化の推進

農業に取り組みやすい環境づくりや基盤整備を行い、町経済を支える基幹産業を強化します。また6次産品化など、農作物を活かした付加価値の高い商品の開発と地産地消、地産外商を促進します。

・農業基盤整備の推進
・農業所得の向上に向けた学びの場の充実
・農産物の6次産品化の推進
・耕作放棄地の整備と活用の推進
・農家を支える仕組みづくり

施策 8　自伐型林業を核とした林業の推進による雇用づくり

豊かな森林資源を活用した林業を推進し、林業を始めやすく、従事しやすい環境づくりに取り組み、自伐型林業を核とした雇用の場を創出します。

・林家のスキル向上の場づくり
・自伐型林業に従事する地域おこし協力隊の雇用
・放置されている山林資源の一元管理、整備
・林業従事者への支援体制強化
・森づくりの普及・啓発活動の推進

施策 9　さかわ産木材を活用したものづくりの推進

木材の加工･販売が行える体制を整え、さかわ産の木材を活用したものづくりを推進し、ものづくりのできる人材を育成します。

・加工施設の整備
・ものづくりの人材の確保と育成
・ものづくりを学ぶ場の創出

施策 10　農業･商工業の後継者対策の推進

農業･商工業を推進･発展させ、未来へつなげるために、I･Uターン者などを中心とした担い手を確保し、後継者の育成を推進します。

・新規就農者の支援
・農・商工の基盤継承の推進
・広報活動など情報発信の強化
・事業承継の推進

施策 11　スモールビジネス起業支援による商工振興

地域の良さを活かした新たな産業の創出や意欲ある起業者への資金や設備面での総合的な支援を積極的に行い、地域資源を活用したスモールビジネスの起業を支援します。

・スモールビジネス起業支援の仕組みの整備
・起業者対象の研修会等の実施
・空き家や空き店舗の活用の推進
・スモールビジネスを地域で支える体制づくりの強化

施策 12　さかわ産商品の開発・流通・販売体制の整備

地域資源を活用した、さかわならではの特産品の開発を推進します。また、開発に関わる人材の育成や、さかわブランドの推進に加え、国内外を含めた流通体制を強化、整備します。

・道の駅を含めた販売施設の整備
・さかわの資源を活かした商品開発の支援
・流通・販売のネットワークづくり
・開発、流通、販売スキルの向上の推進

施策 13　企業誘致による雇用づくり

空き家整備などを通じ、立地条件や移転の仕組みを整え、全国から、さかわの資源を活用したビジネスが行える企業を誘致します。

・営業活動による企業誘致の推進
・空き家、空き店舗の活用制度の充実
・町内事業者等との連携体制の構築
・メディアを活用した情報発信の強化

（3）結婚・出産・育児

結婚したい、産みたい、町民1人ひとりの希望を叶え、子どもを地域ぐるみで育てる環境を整えます。

現状と課題

女性の社会進出、若い男女が出会う地域活動の減少、結婚を後押しするお世話役の減少により、出会い、結婚にいたる男女が減っています。結婚し、子どもを授かったとしても、仕事をもちながら子どもを産み育てられる環境が充分に整っておらず、望む数の子どもを産み育てることを断念する家族もいます。結婚したい人は結婚できる、子どもを育てたい人は育てられる、個人が望む“家族”のかたちを実現できる環境を地域ぐるみで整えていく必要があります。

施策 14　出会い・恋愛・結婚の希望を叶える環境づくり

結婚を望む男女の出会いの機会づくりを地域ぐるみで後押しするための体制、仕組みをつくります。

・婚活イベントの支援
・結婚を地域ぐるみで後押しする体制の強化
・出会いを促進する情報発信の強化

施策 15　安心して子どもを産める環境づくり

医療や福祉などとの連携を強化し、次世代を担う子ども達を安心して、産み育てられる環境づくりを推進します。

・妊産婦への支援体制強化
・保育サービスの充実
・地域子ども子育て支援事業の推進
・妊娠、出産に関する情報発信の強化
・出産、育児における保健、医療、福祉、教育などのネットワークづくり

施策 16　地域ぐるみで子育てできる環境づくり

子育てを地域ぐるみでサポートする体制づくり、子どもと子育て中世帯に優しい環境づくりを進め、地域全体で子育てを後押しします。

・子育てを地域で手助けする仕組みづくり
・地域で子どもを育てる意識啓発の推進
・地域住民の PTA や子ども会などへの参加の推進
・支援が必要な家庭への援助サービスの充実

施策 17　子どもが安心して遊べる環境づくり

小さな子どもをもつ家族や子ども同士でも安心して出かけ、遊べる環境づくりを推進します。

・自然を活用した安心して遊べる場の整備
・親子連れに優しい環境づくりの推進
・地域での子どもの見守り体制の強化

施策 18　子育て世代を支えるつながりの強化

子育て世代同士の交流を促進し、子育てに対する悩みや疑問を共有できる、助け合える、学び合える関係づくりを推進します。

・子育てに関する情報交換や学習機会の充実
・子育てを通じたコミュニティづくりの推進
・子育て世代の交流機会の創出

施策 19　働きながら育てられる環境づくり

家庭・保育・学校・行政の連携を強化し、仕事と家庭を両立できる就労環境づくりを推進します。

・父親の育児参加の促進
・仕事と家庭を両立するための支援体制づくり
・子育てに関する相談機会の充実
・病児・病後児保育など母子保健対策の推進
・学童保育事業など子育て世代のニーズにあったサービスの充実

（4）観光振興と情報発信

さかわの豊かな地域資源を活用した観光コンテンツを開発し、体系的な情報発信により、地域外から観光客や移住希望者を惹きつけられる強いさかわブランドを築きます。

現状と課題

牧野富太郎博士を輩出した豊かな自然環境や、文教の町が誇る歴史的な街なみなど、佐川町には多くの観光資源があります。平成25年に復活した観光協会の設置に伴い、町としても観光地・佐川の魅力づくりに力を入れてきました。街なみの整備や観光ボランティアガイドの充実など、一定の成果を上げた事業もありますが、佐川の観光資源を活かしたイベントや体験プログラム、お土産などが充分でなく、わざわざ足を運びたくなる理由にいまひとつ欠けています。町民自身も、佐川の魅力や資源への理解が薄く、みんなで観光を盛り上げようという気運が低いという状況にあります。町外の人にとって「訪れたくなる町」「住みたくなる町」は、町民にとって「誇りに思える町」です。佐川にある資源を磨きあげ、内外に発信していくことで、多くの人を惹き付ける強い佐川ブランドを確立することが求められています。

施策 20　“植物の町”を打ち出す観光コンテンツの開発

佐川町にある植物・森林・農作物などの豊富な自然資源の魅力を再発見・再発掘し、佐川町の自然をまるごと体験できる多種多様な観光コンテンツを開発します。

- 植物の町を打ち出す広報活動の実施
- 自然体験型のイベントやプログラムの開発
- 自然資源を活かした観光名所づくりの促進
- 多様な農作物を活かした特色のある食体験の充実
- 自然資源を利用したお土産品の開発

施策 21　“文教の町”を伝える観光コンテンツの開発

地域に受け継がれてきた伝統芸能や文化、歴史的遺産を、地域みんなで磨き上げ、町内だけにとどまらない、学び、体験できる観光コンテンツを開発します。

・歴史的な遺産や街なみの維持・管理
・地域での伝統芸能継承活動の促進
・地域の伝統行事の外部への情報発信の強化
・伝統芸能に触れる観光プログラムの充実
・歴史的遺産を学ぶ学習型プログラムの充実
・文化財保護活用の推進

施策 22　佐川ブランドの確立と情報発信の強化

関係機関と連携しながら、自然や歴史などの魅力ある地域資源を活かした「佐川ブランド」を形成し、町一丸となったイメージづくりに努めます。また、これらを全国に向けて発信し、佐川ブランドの認知度向上を推進します。

・ブランドガイドラインの作成と運用体制の整備
・佐川ブランドの体系づくり
・ブランドイメージの情報発信の促進

施策 23　観光エキスパート人材の育成

町民全員が佐川町の歴史や資源を深く知ることで、佐川の魅力を再認識するとともに、佐川町の魅力を外部に発信できる人材を育成し、町全体で佐川を盛り上げる気運をつくります。

・町民自身が地域の魅力を再発見する機会の創出
・観光に携わる関係主体が共に学ぶ体制づくり
・観光ガイドの組織づくりの推進

施策 24　観光協会･行政･町民が一体となった観光客受け入れの整備

観光の中心機関となる観光協会をはじめ、行政、地域住民が一体となり、町ぐるみで観光客を受け入れる体制の強化を図ります。

・観光協会、行政、住民の協働体制の強化
・観光拠点施設の充実
・地域密着型の観光サービスの充実
・国内外交流の推進
・仁淀川流域など広域観光の推進

施策 25　情報発信と雇用･住環境整備を中心とした移住･定住促進

1次産業との連携強化や空き家の整備により、移住者の雇用と住居を確保します。また、地域ぐるみで移住者をサポートする体制の充実を図るとともに、移住者にとって必要な情報を効果的に発信していきます。

・空き家の調査とリノベーション
・1次産業との連携強化による仕事と住居が一体となった移住プログラムの充実
・移住者のニーズにあった仕事情報の提供
・移住者のニーズに即した移住制度の整備
・移住情報の発信の強化

（5） 健康と福祉

みんなが健康で生きがいを持ち、支え合いながら誰かのためにイキイキと活躍できる県内一の健康長寿の町を実現します。

現状と課題

わが町の高齢化率は年々上昇を続けており、平成37年には町民5人中2人が高齢者となり、ひとり暮らしの高齢者も増えていくと見られています。高齢化率の上昇に伴い、長くなった老後をよりよく過ごすために自立して健康に生活できる期間“健康寿命”を伸ばしていこうという意識が高まっています。一方で、健康診断の受診率が低く、既にある健康増進機会への参加者も固定化されているなど、町民全体の健康づくりへの意識が高いとはいえません。福祉、介護、医療の充実とあわせ、みんなが支え合える地域をつくります。障害福祉の充実や、地域の方の障害への理解も必要です。高齢者･障害者に限らず、1人ひとりが元気に健康でいられることが、元気な町を創りだします。地域みんなで健康的なライフスタイルを身につけ、子どもから高齢者まで誰もが身体的にも精神的に元気に暮らせる町づくりが求められています。

施策 26　予防医療サービスの充実

高北病院をはじめとした関係機関とのさらなる連携強化を図り、町民一人ひとりが健康な生活を送ることができるよう、健康教育・予防医療の充実を推進します。

・日常的な予防医療の充実
・健康づくりに関する学び機会の充実
・健康相談体制の充実

施策 27　健康診断受診の習慣化の促進

疾病の早期発見・早期治療のためにも、定期的な健康診断の受診が大切です。全国的に遅れをとっている健康診断受診率の向上を推進します。

・健診受診グループづくりの推進
・柔軟性のある検診機会の創出
・健康診断に関する情報発信の強化

施策 28　地域ぐるみでの健康づくりの推進

地域での健康づくりの活動を支援します。生活習慣病を予防し、健康な生活を送ることができるよう、運動や食生活の改善に関する意識啓発と情報発信を行います。

・スポーツを中心としたコミュニティづくりの推進
・散歩やランニングなどを通じた健康づくりの推進
・住民が自由に使える運動の場の整備
・保健や福祉、医療が連携した健康指導の充実

施策 29　セカンドライフ充実のための生きがいづくり支援

高齢者の世代間交流や、仲間づくりを支援し、高齢者の生きがいや居場所づくりなどセカンドライフの充実を推進します。

・世代間交流の推進
・あったかふれあいセンターの活用の促進
・生きがいづくりの意識啓発と情報発信
・同世代との交流の場づくりの推進
・退職者の活躍の場づくりの推進

施策 30　地域の力を引き出す地域包括ケアの体制整備

年老いても、住み慣れた地域で、その人らしい生活を継続できるよう、地域ぐるみでの支援体制づくりに取り組みます。

・地域ケア会議の活用促進
・認知症患者、家族への支援体制の充実
・地域ぐるみ体制の強化

施策 31　障害児者福祉の推進

障害児者とその家族が、安心して社会生活を営むことができるよう、必要な設備の整備やサービスの向上に取り組みます。また、教育・就労等の機会を充実させるため、関係機関との連携を強化します。

・日常生活を支える環境の整備
・相談支援体制の充実
・教育・就労・社会活動の機会の充実
・関係機関との連携強化
・障害者福祉の啓発活動の推進
・地域福祉、安全対策の推進
・保健医療の推進

（6）安全・安心

お隣同士、自治会内、地域内の関係性を密にし、安心して暮らせる生活環境を町民みんなで守り、作りあげます。

現状と課題

今後30年の間に70％の確率で発生すると予測されている南海トラフ地震や、高齢化に伴う要支援者の増加、ご近所づきあいやコミュニティの減少による地域のつながりの希薄化により、日常生活の安全・安心が揺らいでいます。自主防災組織づくりの推進や防災メールの配信などこれまでの取り組みにより、地震をはじめとする災害に強い地域をつくるための基盤整備に取り組んできました。今後、これらの仕組みを充分に活用しながら、お隣同士、自治会内、地域内の関係性を密にし、安心して暮らせる生活環境をみんなで作りあげていく必要があります。

施策 32　南海トラフ地震に備えた町づくり

近い将来、高い確率で発生する南海トラフ地震による被害を最小限にするため、住宅の耐震化や家具の転倒防止対策等に取り組み、地震に強い町づくりを進めます。

・建築物や公共施設の耐震化の促進
・一般住宅の耐震診断の促進
・家具転倒防止策の推進
・避難経路の支障となりうる空き家住宅等の対策
・拠点避難所の機能強化
・災害時に救援部隊が展開する防災拠点の整備

施策 33　自主防災組織の活性化と防災となり組の促進

災害時には地域で支え合い、お互いに助け合える仕組みが重要となります。そのため、自主防災組織や防災となり組といった地域で自立的に助け合える組織づくりを促進します。また、自主防災組織が災害時にスムーズな防災活動を行えるよう、防災資機材の整備や学習会・防災訓練の実施を支援します。

・自主防災組織、防災となり組の組織化
・自主防災組織における防災資機材や防災マップの整備促進
・防災訓練や防災学習会の促進
・各世帯ごとの避難計画の作成支援と自主防災組織による避難支援体制の整備促進

施策 34　住民生活を支えるインフラ整備

道路や水道、学校、公民館などの住民生活を支える公共財産を最適に維持管理するため、公共財産の管理計画を策定し、町民と協力しながらインフラ整備に取り組みます。

・道路、橋梁の長寿命化計画の推進
・水道事業経営計画の策定と推進
・ごみ処理対策の推進
・生活排水、し尿処理対策の推進
・公共住宅を中心とした住環境の整備
・ドクターヘリの受け入れ先の充実
・地域住民主導のインフラ整備の推進

施策 35　安全・安心対策の強化

火災はもとより、多種多様な災害に迅速に対応できるよう、高吾北消防本部と連携し、消防団の育成・強化をはじめとする消防・救急体制の充実に努めます。また、交通事故と犯罪のない、安全・安心な町づくりのため、関係機関と連携し、道路環境の整備や交通安全意識の啓発に努めるとともに、犯罪抑止のための防犯灯整備や、近年多発する特殊詐欺、悪質商法などから消費者を保護し被害を未然に防止する対策に取り組みます。

・防災施設整備の充実
・緊急用ヘリコプター離着陸場の整備
・老朽化による危険箇所の解消
・交通危険箇所の解消
・交通安全意識の普及啓発
・消防団の育成、支援
・消費者保護対策の推進

施策 36　ITを活用したあんしん生活情報の共有

地震、風水害などの災害情報、多様化する犯罪から身を守る防犯情報に加え、イベントや行政情報などの生活情報を各種IT手段を使って共有し、町民の安全、安心な暮らしを守ります。

・多様な情報通信手段の活用
・ホームページの内容充実とタイムリーな情報更新
・メール配信システムの適切な運営

施策 37　地域の実情に即した公共交通の確立と維持

佐川町の公共交通として町が委託する代替バスとJRがありますが、公共交通空白地域が多く存在しています。地域のニーズに合った新たな公共交通を確立し、利便性の向上を図ります。

・地域公共交通計画の策定と推進
・新しい移動手段の導入の検討
・移動に関する地域内での支え合いの推進

施策 38　支えあい・助けあいネットワークの推進

少子高齢化の進行に伴い、核家族化や高齢者のひとり暮らしが増加しています。また、生活態様の多様化により、人と人とのつながりが希薄化しており、支えあい助けあえる関係づくりが重要となっています。まずは誰もが集える場づくりを推進し、地域での助け合いを推進します。

・地域内での支え合いのネットワークづくり
・集落活動センターやあったかふれあいセンターなどを活用した誰でも集える場の整備
・民生委員や世話役の育成
・生活困窮者の生活、社会参加の支援

（7） 行財政

将来を見据えた財政運営を推進し、町民・役場が一体で町づくりを推進できる情報共有、組織づくり、人材育成を進めます。

現状と課題

地域主権の流れをくみ、町民も行政も一体となって特色のある町づくりに取り組むことが求められています。第4次総合計画期間中も、町民と行政職員の協働機会の創出や、行政情報の開示などに取り組んできましたが、人口減少が進み、地方財政の厳しさが増し、今後は、これまで以上に開かれた行政運営が必要がです。また、地域主権に伴い、役場職員に求められる能力も変わりつつあります。住民の声をしっかり聞き、そこから政策立案、業務改善を行う力、限られた予算の中で、しっかりと行財政を運営していく力、地域主権を進める町づくり人材を育てていく力。今の時代の行政職員に求められる高度なスキルの習得とそのためのひとづくりの仕組みの整備が求められています。

施策 39　行政職員の能力強化

多様化・高度化していく行政需要に的確に対応し、地域課題の解決に取り組むため、職員の人材育成に取り組みます。職員1人ひとりが、常に求められる役割を意識し、能力を高め、組織全体としても職員の人材育成を推進します。

- 多様な職員研修の実施
- 人事評価制度、適材適所の人材配置の推進
- 地域担当制導入の検討
- 職員の自主性を高める仕組みづくり

施策 40　コンプライアンスの徹底

公正な町政運営を行っていくための基本となるコンプライアンスを徹底します。社会規範に反する不適切な処理･決定を防ぐために、職員一人ひとりがコンプライアンスへの意識をもち業務を行っていくよう研修を実施し、適切な事務処理を行える組織づくりを推進します。

- 事務処理、会計処理の研修の実施
- OJT の徹底
- マニュアル、指針の策定

施策 41　開かれた組織づくり

町民ニーズの多様化や社会状況の変化に柔軟に対応できる開かれた組織づくりに取り組みます。人物を重視した計画的な職員採用の実施や人事評価を反映させた職員の適材適所の人事配置を行います。また、縦割りではなく、プロジェクトチームなど横断的に業務を実施できる体制づくりを推進します。

- 外部組織との連携強化
- 事業の見直し、改善の実施
- 庁議の活性化
- 組織体制の充実による住民サービスの向上

施策 42　将来を見据えた財政運営

自主財源に乏しい財政状況の中、地域課題やめまぐるしく変化する社会状況に対応するため、将来を見据えた安定的な財政運営に取り組みます。多様化する住民ニーズを的確に把握しつつ、中長期的な財政の健全性を確保していくことが重要となります。

・公共財産管理計画の策定と推進
・自主財源確保の徹底
・公共施設等の総合的かつ計画的な管理
・PDCA サイクルに基づく事業の見直しや改善の推進

施策 43　役場と地域をつなぐ広報・広聴の強化

広報誌やホームページなどの内容充実と利便性の向上を図り、行政と住民が情報を共有することで町づくりに一体となって取り組む体制を構築します。また、広聴体制を充実させるため、地域での意見聴取の機会を継続的に実施します。

・広報誌の充実
・広報媒体の多様化
・あらゆる事業でのワークショップの活用
・SNS 等の活用による双方向システムの検討

施策 44　町づくりを担うファシリテーター人材づくり

地域づくりを進めるための基礎となる「自分ごと」意識の醸成を図るため、多様な意見を引き出し、合意形成を図る地域のファシリテーターを育成します。ファシリテーター活用による話し合いを推進することで地域の課題を地域で考え、解決する、楽しさ、充実感を感じてもらい、町づくりへの参加を促進します。

・ファシリテーター講座の開催
・事業計画時のワークショップの活用

施策 45　未来へつながる人権尊重の推進

大人から子どもまでの誰もが平等に権利を持ち、お互いの人権を尊重し、責任を分かち合い、個性を発揮できる社会を確立するために、地域全体で人権を尊重しあう社会を実現します。

・男女共同参画社会の推進
・学習、研修機会の創出
・広報、啓発活動の定期的な実施
・虐待、DV などの防止対策の推進
・人権意識の啓蒙活動の推進

参考資料

1. 佐川町総合計画審議会

	氏名	所属
委員	松浦　隆起	佐川町議会
	坂本　玲子	佐川町議会
	川井　正一	佐川町教育委員会
	北添　正男	佐川町農業委員会
	山根　邦仁	佐川町
	堀見　昇出	佐川町商工会
	西森　寿	コスモス農業協同組合
	田村　佳久	佐川町社会福祉協議会
	大山　端	さかわ観光協会
	山崎　隆義	佐川町金融団
	清原　泰治	高知県立大学
	岡﨑　笑顔	佐川町男女共同参画推進委員会
	川﨑　まり	黒岩いきいき応援隊
	森田　有紀	あったかふれあいセンターとかの
	岡添　豊彦	佐川町自治会長会　佐川地区
	庄野　孝也	佐川町自治会長会　斗賀野地区
	横田　三夫	佐川町自治会長会　尾川地区
	谷脇　正純	佐川町自治会長会　黒岩地区
	久保　成悟	佐川町自治会長会　加茂地区
アドバイザー	尾下　一次	高知県産業振興推進部
	大町　彩菜	高知県計画推進課

2. 経過

年月日	会議名	内容
平成27年4月27日	第1回 総合計画策定審議会	第５次佐川町総合計画の特徴や策定に至るプロセス等について共有し、平成26年度に取り組んだ町民アンケートやコミュニティヒアリング、しあわせ会議などの内容をふまえ、今後の進め方について協議しました。
平成27年8月3日	第2回 総合計画策定審議会	16回の未来づくりサロンで話し合われた内容を共有し、未来づくりサロンで町民から出された意見やアイデア、アクションをふまえ、それぞれの分野で欠けている視点や追加すべき内容がないか協議しました。
平成27年10月14日	第3回 総合計画策定審議会	第５次佐川町総合計画で目指す町の未来像や基本な方針を共有しました。また、町民からの意見やアイデアをもとに作成された7分野45施策（案）について協議しました。あわせて、町民向けの総合計画別冊についても、意見をいただきました。
平成27年11月24日	第4回 総合計画策定審議会	第５次佐川町総合計画（案）について、最終の協議をしました。また、総合計画別冊についても町民アクションがどのような形で掲載されるかイメージを共有し、意見をいただきました。

3. 佐川町総合計画審議会条例

（設置）
第1条　地方自治法（昭和22年法律第67号)第138条の4第3項の規定に基づき、佐川町総合計画審議会（以下「審議会」という。)を設置する。

（任務）
第2条　審議会は、町長の諮問に応じ、本町の総合計画の策定及び実施に関して、必要な調査並びに審議を行いその結果を町長に答申する。
2　審議会は、総合計画の実施の進捗状況に関して、必要があると認めるときは、町長に建議することができる。

（組織）
第3条　審議会は、委員20人以内で組織する。
2　委員は、次に掲げる者のうちから町長が委嘱又は任命する。
(1)　町議会の議員　2人
(2)　町教育長及び教育委員会の委員　1人
(3)　町農業委員会の委員　1人
(4)　町の職員　1人
(5)　町の区域内の公共的団体の役員及び職員　5人
(6)　まちづくりや地域活動の知識、経験のある者　5人
(7)　町の自治会長会の役員　5人

（委員の任期）
第4条　委員の任期は、2年とする。ただし、補欠委員の任期は、前任者の残任期間とする。
2　委員が委嘱又は任命された時における当該身分を失った場合は、委員を辞したものとみなす。
3　委員の再任は妨げない。

（会長及び副会長）
第5条　審議会に会長及び副会長を置き、委員の互選によってこれを定める。
2　会長は、会務を総理し、審議会を代表する。
3　副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。

（会議）
第6条　審議会の会議は、会長が招集し、会長が議長となる。
2　会議は、委員の半数以上の出席がなければ会議を開き、議決することができない。
3　会議の議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

（事務の処理）
第7条　審議会の事務は、企画主管課で処理する。
（委任）
第8条　この条例に定めるもののほか、審議会の運営に関し必要な事項は、町長が定める。

4. 参考資料

『コミュニティデザイン 人がつながるしくみをつくる』 2011.04.22 山崎亮 著（学芸出版社）
『第四次海士町総合振興計画』2009.04.01 発行　島根県隠岐郡海士町（未販売）
『豊かさとは何か』1989.09.20 暉峻淑子 著（岩波新書）
『豊かさの条件』2003.05.20 暉峻淑子 著（岩波新書）
『しなやかな日本列島のつくりかた』2014.03.18　藻谷浩介 著（新潮社）
『図解 人口減少経済 早わかり』2010.05.12　奥村 隆一　著（中経出版）
『これからの総合計画―人口減少時代での考え方・つくり方』2013.10.22　一條 義治 著（イマジン出版）
『地域を変えるデザイン』2011.11.28 筧 裕介 著（英治出版）
『ソーシャルデザイン実践ガイド 地域の課題を解決する7つのステップ』2013.09.10 筧 裕介 著（英治出版）
『人口減少×デザイン 地域と日本の大問題を、データとデザイン思考で考える。』2015.06.02 筧 裕介 著（英治出版）
『まちの幸福論―コミュニティデザインから考える』2012.05.24 山崎 亮 著（NHK出版）
『ワークショップ―住民主体のまちづくりへの方法論』2007.01.30 木下 勇 著（学芸出版社）
『データでわかる2030年の日本』2013.05.10 三浦 展　著（洋泉社）
『幸せのメカニズム 実践・幸福学入門 – 2013/12/18』2013.12.18 前野 隆司 著(講談社)





第5次 佐川町総合計画

チームさかわ まじめに、おもしろく。

2016年4月1日発行

発行:高知県佐川町